NIPPON TAIWAN 2020

第17回 日台文化交流青少年スカラシップ

実施報告書

NIPPON TAIWAN 2020

第17回日台文化交流 青少年スカラシップ
入賞者（順不同）

スピーチ部門

大　賞

岩﨑　綸央　東京中華学校 高校1年

優秀賞

岩田　怜晟　聖学院高等学校 3年
清水彩也香　横浜中華学院 高校1年
髙橋　志織　宇都宮大学 4年
南雲　怜花　光塩女子学院高等科 3年
根本　順　東京都立深川高等学校 3年

奨励賞

磯部　有花　東京農業大学第二高等学校 3年
日下千瑛美　拓殖大学 2年
松本　愛李　東京中華学校 高校1年
水浦　麻結　横浜中華学院 高校1年
森　友梨花　杏林大学 3年

作文部門

優秀賞

石倉　要　松江市立八雲中学校 3年
岩松　端　芝浦工業大学 3年
小川　友希　東京都立立川国際中等教育学校 3年
下條　円雅　学習院女子高等科 2年
関本　晃希　立教新座高等学校 2年
沼上　楽　加藤学園暁秀高等学校 1年
村上　陽香　立命館慶祥高等学校 2年
吉浜　雅　聖心女子学院高等科 2年

奨励賞

井田　莉子　昭和学院高等学校 2年
小川裕宇那　滝中学校 2年
川田　知佳　淑徳与野高等学校 2年
椚山亜莉沙　千葉県立千葉高等学校 1年
嶋田信之介　東京中華学校 高校2年
新間　升子　東京大学教育学部附属中等教育学校 2年
立石雄祐大　中央大学 2年
濵田　知津　東京都立豊多摩高等学校 1年
舟山　優也　山形大学 4年
増尾　諒一　東京大学教育学部附属中等教育学校 2年
松岡　律樹　滝川高等学校 2年
柳澤明日美　群馬県立中央中等教育学校 3年

佳　作

青山　春香　長崎県立諫早高等学校附属中学校 2年
大町　誠也　東京大学 1年
小笠原伶晏　聖ウルスラ学院英智高等学校 1年
小椋日奈都　東京大学教育学部附属中等教育学校 2年
酒井　嶺　昭和学院高等学校 2年
渋澤　一真　東京都立豊多摩高等学校 1年
志村　咲紀　山梨県立甲府南高等学校 2年
髙野　乃愛　加藤学園暁秀高等学校 1年
根元　美咲　聖ウルスラ学院英智高等学校 2年
毛利　実優　清水国際高等学校 2年

NIPPON TAIWAN 2020

※学校名、学年は2020年3月現在

実施報告

日本と台湾の青少年による文化交流の促進を目指す「第17回日台文化交流 青少年スカラシップ」は作文とスピーチ(中国語・台湾語)の2部門で学生を募集し、427点の応募がありました。

今回は新型コロナウイルスの影響を考慮し、受賞者にお贈りする予定の副賞「台湾研修旅行」については、台湾ペア旅行券(日程を選べる2泊3日のキャンペーン旅行2名様分)に変更しました。また、3月24日(火)に実施を予定していた授賞式・懇親会についてはやむを得ず中止としました。

主　催：産経新聞社　　日本工業新聞社(フジサンケイビジネスアイ)

共　催：台北駐日経済文化代表処

特別協賛：アパホテル　JR東海

協　賛：MITSUI & CO.　臺灣新聞社 TAIWAN NEWS

協　力：外交部　教育部　台湾日本関係協会　Taiwan 台湾観光局

後　援：公益財団法人 日本台湾交流協会 Japan-Taiwan Exchange Association　自由時報

審査委員（敬称略）

審査委員長　渡辺　利夫　拓殖大学 学事顧問

作文部門審査委員

張 温 恭　台北駐日経済文化代表処 広報部 次長

さかもと未明　アーティスト

室舘　勲　株式会社キャリアコンサルティング 代表取締役

林 翠 儀　自由時報 東京特派員

河崎　眞澄　産経新聞 論説委員

スピーチ部門審査委員

顧 欽 誠　台北駐日経済文化代表処 広報部 部長

馮 彦 國　横浜中華学院 校長

呉 育 珊　東京中華学校 教務主任

林 翠 儀　自由時報 東京特派員

河崎　眞澄　産経新聞 論説委員

第17回「日台文化交流 青少年スカラシップ」祝辞

台北駐日経済文化代表処 代表 謝長廷

受賞者の皆さん、おめでとうございます。

「日台文化交流 青少年スカラシップ」は、日本の青少年に台湾の歴史や文化、近年の社会の発展などへの認識を深めてもらい、今後の台湾と日本の新世代の交流の懸け橋となる人材となっていただくことを願い、今年で17回目の開催となりました。これまでに入賞した皆さんの先輩には、台湾に留学したり、台湾に関係する仕事に就いた人もいて、台日友好の頼もしい懸け橋になっています。

今年も昨年と同様に「作文」と「スピーチ」の2つの部門を募集し、入賞者はいずれも台湾に対する知識の豊富さのみならず、実体験に基づく台湾とのつながりが率直に語られ、台日間の人と人との関係の緊密さを改めて感じました。受賞者の皆さんは、作文やスピーチに込めた台湾への思いを、今後自分なりの形で実践していただければと期待しています。

今回は大賞が「スピーチ」部門から選ばれました。未来の台湾と日本の関係発展のためには、言葉の壁を越えて思いを伝える能力がますます必要となっています。スピーチの「話す」能力を若いときから鍛えることは、将来の友情が末永く続くことに大きく寄与することと確信しています。

今年は、新型コロナウイルスによる肺炎の感染拡大の影響で、毎年行われていた受賞者の表彰式および台湾への研修旅行が実施できなくなりました。非常に残念ですが、伝染病が国境を越える現実をよく学び、日本や台湾の防疫の取り組みに注目し、世界各国が一致協力して伝染病の拡大を食い止める大切さと、台湾のＷＨＯ（世界保健機関）への参加の必要性などに理解を深めていただければと思います。

そして、ウイルス感染の流行が落ち着いたときに、また皆さんが台湾に来ていただけることをお待ちしています。どうぞ今後も台湾と日本の関係発展に関心を寄せていただきますよう、よろしくお願いいたします。皆さんのご健康と学業のさらなる発展を祈念いたします。

第17回「日台文化交流 青少年スカラシップ」審査委員長講評

拓殖大学 学事顧問 渡辺利夫

経験を経験知に

中学生などのレベルが格段に上昇しております。「スカラシップ」の潜在力が高まっていることに私は大いなる感銘を受けました。大賞は岩﨑綸央（りお）さんです。おめでとう。

岩﨑さんは日本人です。ごく普通の日本の家族の一員です。あるきっかけから東京の台湾学校に入学することになり、学校では台湾の言葉と習慣の中で、帰宅すれば日本語と日本の習慣の中で生活するという貴重な経験を積んでおられます。岩﨑さんはこの経験をもとに台湾と日本との架け橋となるような仕事をしたい、そのためにまずは台湾に留学したいと考えておられます。スピーチが生き生きとしており、質問への対応も鮮やかでした。

皆さんは学校や地域あるいは海外研修などを通じてさまざまな経験をしておりますよね。しかしそうした経験も、これを文章化しなければ、ささやかな経験としていずれは忘れ去られてしまいます。経験はこれを文章化することにより初めて「経験知」となって皆さんの中に蓄積されていきます。経験知の蓄積が人間を成長させる最も重要なものだと私は考えます。

台湾は私の人生の中で大切な存在です。日本はかつての半世紀、台湾を統治してきました。しかし、その統治はヨーロッパの国々の植民地統治とは明らかに異なるものでした。台湾に古くから伝わる習慣や組織を尊重し、他方で、日本が西洋から取り入れた文明を台湾に導入してその近代化を推し進めました。日本の統治時代に築かれた社会秩序・規範が現在の台湾の中には培われています。

台湾の人々は大変に親日的です。日本人もまた台湾が大好きです。台湾は国際政治の中では厳しい状況におかれています。だからこそ、台湾にエールを送りつづけようではありませんか。台湾、日台交流をテーマにさらに文章力を磨いてくださればと思います。

受賞のコメント（大賞・優秀賞）

スピーチ部門

大賞　岩﨑 綸央
東京中華学校 高校1年

この度はこのような意義あるプログラムに参加する事ができ、そのうえ大変名誉ある賞をいただきました事、心より感謝申し上げます。憧れの賞でしたので、本当に感無量です。

今回は運悪く、新型コロナウイルスの影響により台湾研修旅行は行われませんが、スピーチ最終審査の当日に入賞者同士でLINEの交換をしました。研修旅行には行けなくても、これを機に台湾が大好きな日本人同士で今後も交流していこうと話しています。このような縁を持つ事ができたのもこのプログラムのおかげだと感謝致しております。

スピーチでも述べさせて頂いた通り、私は台湾と何の関わりも持たない日本人でありながら、両親の思い付きで台湾の学校である東京中華学校に小学1年生から入学しました。台湾と日本は距離的にも近く、歴史的にも繋がりが深いにもかかわらず、日本人は台湾の文化や風習を意外に知りません。実際、私が学校で一番苦労した教科が「生活」でした。台湾人にとってはごく当たり前の生活習慣や環境について学ぶ「生活」の授業が、日本人の私や両親には予想以上に知らない事ばかりで、教科書を読んでもなかなか理解できませんでした。教科書に載っている、台湾では身近な鳥や昆虫、そして樹木・草花は日本には生息しないものが多く、私には見た事も聞いた事も無いものばかり。台湾の民間行事やその時に食べるもの、する事、それにまつわる由来や昔話なども全く馴染みが無いので、台湾に行って本を買って読んだり、インターネットで調べたりしました。加えて、学校では生徒達が日本育ちなので先生方がことさら丁寧に台湾の行事や風習について教えて下さり、おかげで私は台湾についていろいろ知る事ができました。

民間行事や風習というものはどの国のものも大変興味深く、とても楽しいものです。私は個人的に日本人は他国の文化や宗教に寛容で、イベント好きだと思います。今や日本ではクリスマスやハロウィンがごく一般的になっています。また最近は台湾ブームという言葉をよく耳にします。タピオカミルクティーが大流行し、台湾で食べる味に近いレベルの豆花（トウホア）・芋圓（ユーユエン）・豆漿（トウジャン）・牛肉麵（ニョウロウミェン）などが日本でも気軽に食べられるようになりました。台湾の食べ物だけでなく、行事や風習などももっと日本に浸透し、更に台湾と日本の距離が近くなれば良いなと私は思っています。

日本人と台湾人は感覚や概念が似ていてお互いとても馴染みやすいと感じます。先輩方や仲間とともに、私も何か少しでも日台交流の一端を担うことができたら大変嬉しく思います。

最後になりましたが、改めましてこのような素晴らしい機会を提供して下さった産経新聞社、フジサンケイ ビジネスアイ、台北駐日経済文化代表処、並びに各協賛・協力・後援の企業及び団体の皆様に深く御礼申し上げます。

優秀賞　岩田 怜晟
聖学院高等学校 3年

今回のスピーチコンテストでは、各参加者の皆さんから台湾との関わりや文化についての独自の見解を聞くことができて大変勉強になりました。私自身、今年から台湾の大学へと進学する計画があり、今回参加することができたことで自分の向上心、探究心、やる気に刺激を多く与えられました。日本と台湾の友好的な関係を維持、促進していくことを目標にこれから勉学に励んでいきたいと強く思います。そして、日本の外に出ることで客観的に日本のことを見つめ直すことも私の使命であります。コロナウイルスの関係で研修旅行が中止になってしまったことは誠に遺憾ですが、自らの目でまだまだ知らない台湾の文化や生活を発見し、自らの耳で聴き、自らの手で日台の新たな関係を築いていきます。このような素晴らしいコンクールを開催していただき、本当にありがとうございました。

優秀賞 清水 彩也香
横浜中華学院 高校1年

このスピーチ大会は、私にとってとても貴重な経験になりました。学校以外の場所で中国語のスピーチをやるのは初めてで、約一か月間必死に練習して、その分本番でものすごく緊張して、自分の出番がくるまで震えが止まりませんでした。でも、名前が呼ばれ前に立った瞬間に、優しそうな笑顔を浮かべている審査員の方々が見えて、緊張が一気にほどけました。参加していた同世代の人達のスピーチを聞いて、それぞれ台湾に抱く印象は違っていて、思い出も内容も全然違うけれど、みんな台湾が好きな気持ちは共通しているなと感じました。それと同時に、たくさんの刺激も受けました。今回は、自分の今の実力を出し尽くせたスピーチで、受賞できてうれしい気持ちでいっぱいです。

私の夢は、日本の食文化を世界中に広めることです。10歳の頃に台湾で感じた異文化交流の楽しさが、6年を経て今の夢につながりました。台湾が私に与えてくれたこの夢を、たとえどんなに長い年月がかかっても、絶対に達成したいと思います！

優秀賞 髙橋 志織
宇都宮大学 4年

この度は優秀賞をいただき、ありがとうございます。私は「日本統治期台湾におけるカフェ」をテーマに大学の卒業研究を進めていく上で、自らの留学経験と重ねながら、多文化共生とは如何なることを指すのか、それを体現している人物について、今回スピーチを行いました。大学での様々な学びが繋がったスピーチで賞をいただけたこと、大変嬉しく思います。新型コロナウイルスの影響から、例年の台湾研修旅行が行えず非常に残念ではございますが、一方で、日本にいて私にできることを考える一つのきっかけになると思っています。日本で見つめ直すことにより、日台の文化交流にも今までとは異なる角度で関わることができる様になるかもしれません。文化交流は日常生活の中で、見えにくい処にも存在しています。私は今後仕事を始める上で、日台のどちらに足を置いていても、そうした細かな文化交流に注目し、行動できる人材になりたいです。

優秀賞 南雲 怜花
光塩女子学院高等科 3年

今回の日台スカラシップへの参加は私にとってとても実りのあるものでした。私は今まで自身の中国語に自信が無く、賞を頂けるとは思ってもいませんでした。しかし今回賞を頂き自身の中国語に自信を持つことができました。また、スピーチ内容を考えるにあたり、改めて台湾へ興味を持った理由、台湾へ行きたい理由を考える事ができました。質疑応答では私の考えていたものとは違う質問を頂き、台湾の方と日本人の考え方の違いを感じ、より一層台湾の文化や考え方について理解したいと思いました。私は今年9月から台湾留学へ行きます。台湾での生活を楽しみに思うと同時に、より高度な中国語能力を得るため精進してまいります。

優秀賞 根本 順
東京都立深川高等学校 3年

生憎ながらコロナウイルス（COVID-19）の影響で賞品が変更され、授賞式が中止となりましたが、受賞できたことをとても光栄に感じます。今、全世界でコロナウイルス対策として各国の国境が封鎖されており、それは日本と台湾も例外ではありません。私は自分も含め優秀賞をいただいた各員は封鎖が解除された後の日台関係のさらなる発展を促進すべく、この賞に見合う活動をせねばならないと考えております。半年後、留学生として台湾に渡る者として、私はその嚆矢となるべく、まだ未熟な身でありますが、日々精進していく所存であります。

最後になりますが、主催の産経新聞社様ならびに審査委員の皆様、そして今大会で共にスピーチを行った参加者とその他関係者各位に感謝と敬意を示すと共に私の拙文を締めさせていただこうと思います。

作文部門

優秀賞 石倉 要
松江市立八雲中学校 3年

このような素晴らしい賞をいただけたことを心からうれしく思います。

僕は、小学3年生から能楽の稽古をしています。650年以上続く能楽の自然観、精神性は、世界平和や環境保全など、現代の地球の課題解決につながると信じています。

地球の課題解決のためには、世界の人とたくさん語り合い、時には折り合いをつけることも大切です。僕は、昨年3月にニューヨーク国連本部を訪問する機会があり、文化や宗教の違いを越えるためには、たくさんのエネルギーが必要であるとわかりました。僕に何ができるだろうかと考えていた時、このコンテストがあることを知り、応募しました。構想を練るため、行ったことのない台湾について情報収集をしているうちに、どんどん台湾が好きになっていきました。互いを知ることは、好きになることなのだと実感しました。

スタディーツアーは中止になりましたが、世界情勢が落ち着いたら、台湾の方に能楽を紹介したり、能楽の自然観や精神性について伝えたりしたいと思っています。これからも、台湾のことをもっと知りたいです。皆さん、応援よろしくお願いします。

優秀賞 岩松 端
芝浦工業大学 3年

今回このような賞に選出して頂きありがとうございます。建築を大学で専攻している私は、建築で世の中に何を与えられるかを常に考えています。台湾には短期留学で訪れそこで日本との様々な違い、共通点を目にしました。そして、いろいろなことを胸に抱えたまま帰国しました。ただそれをどこにぶつけていいか分からなかった私は、様々な方の手助けを受けて台湾の歴史を知りこの文章を作るに至りました。私がこのような賞を頂けたのはこういった様々な方の協力があったからです。現在世間はコロナウイルスの影響で各国の繋がりが希薄になってきているのを感じます。この問題がいつ収束するかは分かりませんが、このような状況だからこそお互いに励まし合うことが必要なのだと感じます。このような時に生まれる絆こそ架け橋になると思います。危機が迫っている時だからこそ自分だけにならず、周りに目を向けて自分に出来ることを探していきたいと思います。

優秀賞 小川 友希
東京都立立川国際中等教育学校 3年

この度は日台文化交流青少年スカラシップにおきまして、優秀賞に選出していただき誠にありがとうございます。大変嬉しく光栄に思っております。

今回、新型コロナウイルスの影響により授賞式と研修旅行が中止になってしまい、非常に残念です。新型コロナウイルスで苦しむ全ての人が一刻も早く助かることを願っています。

先日、台湾の新型コロナウイルスに対する素早い初動対応が世界から賞賛されているという記事を読みました。迅速な対応を可能にした台湾の政治体制や、私が関心を持っている台湾の福祉制度についてさらに知見を広げたいです。

私の夢は小説家になることです。騒動が収まり台湾旅行へ行けたら、その経験を今後、執筆する小説にも取り入れ、台湾の魅力を発信していこうと思います。

今回の受賞を励みに、より一層精進していきます。

ありがとうございました。

優秀賞 下條 円雅
学習院女子高等科 2年

作文のテーマを「ストロー」にしたきっかけは、台湾に旅行した時の気づきと、偶然知ったプラスチックストロー規制のニュースが頭の中で結びついたことでした。記憶にあった台湾のポイ捨ての少なさ、プラスチック規制という思い切った政策。すべてが日本にないもので、素直にすごいと思うと同時に、同じく島国で海の影響を少なからず受ける日本では、なぜこんなにもプラスチックごみに対する意識が違うのだろうと思いました。私がステンレス製のストローを使うことは世界規模で見たらとても小さなことですが、それを自分の家族や周りの人に伝え実行してもらうだけでも、何もしないより環境に優しいことができる。だから、小さいことを無駄だと思わずに、自分が大切だと思ったことは周りに伝えよう。この作文を書くことを通してそう思えるようになりました。副賞として訪れる台湾でもこれからの学生生活でも、ささいな気づきから環境問題について考えたように、何事にも興味を持ち探求し、また周囲に広める姿勢を忘れずにいようと思います。

優秀賞 関本 晃希
立教新座高等学校 2年

日台スカラシップ優秀賞を頂き、本当に感謝の思いで胸がいっぱいです。受賞を知らせるメールを見たときには、思わず喜びの声が出ました。今回の受賞を機に、より一層台湾の歴史、政治、文化に関心を深めていこうと思います。授賞式、研修旅行と楽しみにしておりましたが、新型コロナウイルスの世界的大流行を受けて中止となってしまったのは、大変残念です。しかし、東京オリンピックも延期になってしまったほどの事態なので、やむを得ません。私は来年、大学受験を控えておりますが、代わりに頂いた旅行券で、受験後に初の訪台をして、台北市内の史跡をめぐり、見聞を広めようと思います。台湾の方々とお会いできるのも楽しみです。そして、将来、日本と台湾の連帯を目指して、何らかの形で国際社会に貢献していく人材となれますように、これからも努力精進していきます。この度は、本当にありがとうございました。

優秀賞 沼上 楽
加藤学園暁秀高等学校 1年

日台スカラシップの作文を書くことで違う国に友達を持つことの重要性を改めて感じた。台湾の友達のホームステイを受け入れたという実体験をもとに書くことで、日本と台湾の二つの国の文化や考え方の相違点を見つけることができた。これらの点を見つけたことにより明らかになったのは、お互いの文化や考え方を知ることで初めて信頼関係が生まれるということだ。グローバル化が進む世界で大きな国に飲み込まれずローカルな文化を守っていくためには、小さな国同士がお互いの文化を認め尊重していくことが求められる。ラッキーなことに私には台湾の友達がいるので、私たちがお互いの文化をもっと知り、日本と台湾の架け橋になりたいと思った。今回この作文コンテストで受賞し、頂いた台湾の旅行券を使って友達と再会したいと思っている。この旅行を有意義にするために、行く前に台湾の時代背景を調べて知識を蓄えることが必要だと思う。時代背景などを知ったうえで台湾に行き、日本との文化面や考え方の相違点をさらに探究していきたい。また、日本の文化をもっと知ってもらうためにも自分から日本文化について発信していきたい。

優秀賞 村上 陽香
立命館慶祥高等学校 2年

わたしは台湾万葉集をテーマに作文を書きました。台湾万葉集には、日本統治時代に日本語教育をうけた台湾の方々が日本語で詠んだ２０００首の短歌が収められています。あまりにも滑らかで自然な日本語で綴られた短歌の数々と作者の方々の生い立ちを読み進めるうちに、それまで日台の歴史に関心も知識もなかったわたしが、台湾について知りたい、調べたい、と思うようになりました。また、日本の万葉集と台湾万葉集を並行して読みすすめていくと、同じ場面、情景を題材とした短歌が多くみつかり、国境や時代を超えても人間の心は同じように動かされるのだと、はっとしました。わたしは台湾万葉集に、日本の現代詩だけでなく様々な国の様々な時代の詩を学びたいという意欲を大きく掻き立てられました。また、台湾万葉集と出会ったときの感動は、今後わたしが日本人として台湾と関わるときに大きな意味を持つものになると思います。

優秀賞 吉浜 雅
聖心女子学院高等科 2年

この度は優秀賞に選んでくださり、ありがとうございます。大変嬉しく思っております。他の受賞者の方々にお目にかかれないことが非常に残念です。

本文にも書きましたが、台湾の、高祖父の創立した学校を訪ねた話を母から聞き、台湾について非常に興味を持ったことを機縁として今回のエッセイを書きました。高祖父の軌跡を追うにあたって浮かんだ、人と人、国と国とのあり方への様々な疑問や問題点、無知だった自身への反省を素直に言葉にしました。

様々な情報が溢れている現代において、私たちは意図的に曲げられた事実や、偏った物の見方に晒されています。現に新型コロナウイルス流行による混乱した状況下で、デマにより多くの被害が起きています。ましてや国家間には、多様な見方、価値観が絡んできます。そのような現代だからこそ、自分で物事をしっかりと見極め、より細やかな視点、人と人とのつながりを大切にしていきたいと思います。そして過去と今、未来をつないでいくことのできる存在になれたらと願っています。

スピーチ部門
大賞

●岩﨑 綸央　東京中華学校 高等部1年

我擁有兩個新年

從小學一年級開始，我就在東京中華學校就讀，在學校時，不管是上課或溝通，我都使用華語，並且學習臺灣的生活文化，過著臺灣式的學校生活。而回到家，我必須立刻把我的語言從華語轉換成日語，生活習慣換成日本式，這就是我這十年來的生活方式，這樣的生活方式對我來說已是理所當然。但其實我們家跟臺灣沒有任何淵源，而且也沒有人會說一句中文，當時我的年紀還很小，不理解為什麼父母會讓我進入這所臺灣人的學校。現在才知道，原來是一開始我父親想要讓我接受跟一般日本人不一樣的教育方式，連祖父母在當時知道父母的決定時，也很驚訝。

在我們的學校，每當碰到臺灣的節慶時，學校都會教我們如何慶祝，並說明有關那個節日的禮俗及由來。從小，我就在臺灣及日本，這兩個不同國家的文化轉換裡逐漸成長。而在這兩個不同文化裡，讓我總是充滿期待，並且感到最有樂趣的就是春節，也就是「過年」，日語叫做「お正月」。我不曾在臺灣過過臺灣的新年，但因為臺灣是過農曆新年，所以每當寒假結束，新學期開學時，我才剛過完了日本的「お正月」，開學後就接著要迎接臺灣的農曆新年了。我們會在學校準備春節用的各式各樣裝飾品，用來布置教室，例如春聯、紅金色的春節掛飾等，另外我們也會從老師那裡拿到裝有壓歲錢的紅色袋子，俗稱「紅包」。就這樣很幸運的，我每年都可以度過臺灣與日本兩個國家的年。未來，我希望有機會能在臺灣過新年，更想要嚐嚐臺灣的年夜菜，藉以更進一步了解及體驗臺灣的文化。

臺灣對我來說已不是一個陌生的國家，而是成為培育我成長不可或缺的重要國家之一，更像是我的第二個故鄉，我想要更加了解臺灣的人及事，所以我計畫去臺灣升大學。從國中開始，我就很嚮往能參加日台青少年演講比賽，因為它可以帶給我更多有關臺灣的資訊，也可以讓我結交很多的臺灣年輕朋友，並能讓我體驗到更多臺灣的文化。將來我希望能以我所學，貢獻一份心力來做日本與臺灣的橋樑，這也是我未來的最大心願。

私にはお正月が2回ある

東京にある台湾の学校「東京中華学校」に小学一年生から通う私は、小・中・高とずっと学校では台湾の風習と言葉で過ごし、家に帰ると日本の風習と日本語で過ごしてきた。今ではもう当たり前のようになっている。私の家は完全に日本人の家系で、台湾とは何の縁も繋がりも無く、知り合いもいない。家族の誰も台湾語はおろか中国語もできない。当時私はまだ小さくて両親がなぜ私をこの学校に入れたのか知らなかったのだが、理由は他人とは違う育て方をしたかった父の選択によるものだったらしく、祖父母などは思いもよらない話に大層驚いたそうだ。

私の学校は日本にあるからこそなのか、台湾の行事や祝日、それにまつわる習慣またその由来を生徒によく教え、実践している。日本の風習と台湾の風習、両方の中でずっと育ってきた私にとって、一年で最も楽しみなのは日本で言うお正月、台湾で言う春節、つまり年越しだ。私には正月休みが2回ある。日本の正月休みと台湾の春節休みだ。日本のお正月には年越しそば、お雑煮、おせちを食べて初詣に行き、お年玉をもらう。春節には学校で春聯という新年の飾りつけをし、紅包と呼ばれるお年玉をもらう。一年に二回も年越しという豪華なイベントを味わえ、また二つの国の風習の中で成長している私はとてもラッキーだ。私は今まで台湾で実際に春節の時期を過ごしたことがないので、いつか実際に台湾での年越しを味わいたいと思っている。

日々の半分を台湾の環境で育ってきた私にとって、今や台湾はかけがえのない国の一つだ。第二の祖国と言っても過言ではない。大好きな台湾と台湾の人々をもっと知るためにも大学は台湾に留学したいと思っている。この日台文化交流青少年スカラシップも高校生になったら参加したいと以前から思っていた。日台スカラシップは様々な人の日本と台湾の繋がりが見聞できる魅力的な機会だ。先輩方の研修旅行記も素晴らしかった。私は将来、今までの経験を生かして、少しでも日本と台湾の良きかけ橋になれることを心から望んでいる。

スピーチ部門
優秀賞

●岩田 怜晟　聖学院高等学校 3年

日本和台灣的發展

對我來說，台灣是我的人生的新起點，因為今年我會去台灣念大學。國中生時候，我第一次開始學世界的歷史。在那堂課，我學到了殖民地主義的歷史。從1870年殖民主義的國家為了爭奪霸權侵略了其他的國家。台灣也處在殖民地主義的強壓支配下。其實，日本把台灣殖民化大概50年。我已經知道了台灣跟日本的交流關係超級好，所以那時候這裡產出了一個疑問。儘管台灣被日本佔領許多年，但為什麼現在台灣跟日本有十分友好的關係。台灣不但被日本受控制和權利剝削，也受到發展像學校，高鐵，水庫，下水道什麼的基礎設施。

我覺得台灣現在包含的社會問題適合於日本。比如說人口少子高齡化社會，外國人勞動者，核電站，等等。尤其是台灣的少子化是非常嚴重的社會問題。但是在面對這樣的問題台灣跟日本有一個差異。這是採取措施的速度和熱情。不但台灣的政府，而且台灣人民對那樣的問題有熱情，想要盡快解決不好的情況。在亞洲世界，台灣是同性結婚的合法化的第一名的國家。在心裡包括親手改變自己的國家的意識的日本人越來越少。尤其是年輕人對於日本的政治，經濟和未來沒有熱情。

我現在想分享決定去台灣念大學的原因。透過在台灣的生活我想獲得在各種各樣的事情有興趣的心就是說多方面的角度，積極得挑戰困難的事情。台灣人的個性會讓我影響很多。作為日本的年輕人，我真的希望更發展日本。還我在台灣可以學語言，而且學專門的知識，也體驗台灣的生活文化。台灣是應該支持亞洲未來的發達國家，因此感受另一個亞洲國家台灣的文化和社會有多麼重要。百聞不如一見，如果人們有勇氣邁出一步，他們就會不斷成長。我想讓自己的人生發光。對我來說，台灣留學一定讓我提升很多的能力。台灣和日本彼此有優點，所以比現在更好的台日關係引導整個亞洲發展的一步。

台湾と日本の違いと発展

私にとって、台湾は人生の新しい出発点です。なぜなら私は今年台湾の大学に留学をするからです。中学生の時、私は世界史を初めて習うようになりました。世界史の授業で、私は植民地主義の歴史について学びました。19世紀末から植民地主義の国家は覇権を得るために他の国々を侵略しました。台湾も植民地主義の強い支配下に置かれていました。事実、日本は台湾を約50年間植民地にしていました。今の社会では、台湾と日本は国としての密接な関係にあるだけではなく、両国の人々の間でも友好的な関係にあります。このような良い発展は私の心に一つの疑問を投げかけました。台湾は日本に長い間占領されていたのにもかかわらずなぜ現在台湾の人々は一般的に日本に対して良い印象を持っているのだろうか。台湾は日本から支配されていただけでなく権利を剥奪されていたりもしていたが、一方で日本は台湾の教育の改善、鉄道やダム、その他のインフラストラクチャーの構築にも貢献していたのです。

しかし今、台湾が直面している社会問題は日本でも発生しています。例えば、少子高齢化問題、外国人労働者問題、原子力発電所問題などがあります。特に台湾の少子化問題は非常に重大な社会問題です。しかし、このような問題に直面した台湾のアプローチは日本とは異なります。それは対策のスピードと協力度です。台湾政府が問題を改善するために努力しているだけではなく、台湾の人々も社会的な問題に関心があります。アジア諸国の中で、台湾は同性婚を合法化した最初の国であり、ニュースで見た多くの若者の社会の変革を目指した行動は私に深い敬意を抱かせました。なぜなら、日本では大多数の人は国家の議題に関心を持ちません。特に多くの若年者は日本の政治、経済、そして将来の発展をあまり考えません。

最後に、台湾の大学に進学することを決心した理由を共有したいと思います。台湾での生活を通して、私は様々な経験をしたいと思っています。今まで出会ったことのない物事に対して、恐れずに探求し、自分の殻から抜け出して自分自身に挑戦していきます。台湾の人々の性格は私に大きな影響を与えてくれます。日本の若者として、他の若年者が周囲の事柄に関心を抱くことができればと思っています。そして、台湾では言語を学ぶことに加えて、大学の専門知識を学び、台湾の生活と文化を体験することもできます。人は新たに一歩踏み出す勇気を持っているなら、いくらでも成長することができます。私は自分自身の人生を輝かせたい。私にとって台湾への留学は、専門能力を磨いていくだけではなく、今持っているよりも広い視野を与え、大きな成長をもたらしてくれると思っています。台湾と日本には互いに長所があるから、台湾と日本の関係を今以上に良くして、アジア全体の発展に力を注ぎたいです。

スピーチ部門
優秀賞

●清水 彩也香　横浜中華学院 高校1年

溫暖的臺灣

您，對臺灣的印象是什麼呢？ 譬如說：按摩、夜市、寺廟、美食……等。每個人的心中肯定有各種不同的答案；而我，對臺灣的印象則是「溫暖」。臺灣年均溫高、氣候暖和，但我所謂的「溫暖」並不是指天氣的溫暖，而是臺灣人那顆——親切、溫暖的心。

我曾經去過臺灣三次，每一次都能感受到當地人的熱情及善良。第一次是我和父母的家庭旅行，我的父母是日本人，因此我們是用日語溝通。我們一同到餐廳用餐時，那裡的店員知道我們從日本來，特地用自己不熟悉的日文，一個一個向我們解釋菜單的菜色，實在令人感動不已！同時也讓我們對臺灣留下了深刻的印象。

又有一次，中學畢業旅行去臺灣，我和朋友一起在紀念品店時，有一位阿姨問我們：「Are you Japanese?」我們回答：「Yes. 但是我們會說中文！」那位阿姨因此特意配合我們的速度，慢慢用中文，一字一句和我們聊天，讓我們深刻感受到臺灣人的親切。我覺得臺灣這片土地因為有這些善良又開朗的人們，而深深溫暖了旅人的心。

不管來自什麼國家的人，溫暖的臺灣人總是會展開雙臂，熱烈歡迎，用心招待。反觀來說，那我呢？我能為訪日的外國人做些什麼呢？若在街上遇到需要幫忙的旅人，我會幫忙嗎？ 在臺灣感受到的溫暖給我了一個很大的啟發，過去的我，可能因為語言的不同而害怕與外國人溝通，拒他人於千里之外。不過，臺灣經驗教會了我「接受多元文化」，一個種子因此在我心中萌芽。

我有一個夢想，就是讓全世界感受到日本的魅力，進而使更多人喜歡上日本。我從小就對異國文化及語言有興趣，而支撐這個夢想的理由正是因為在臺灣親身體驗到交流的樂趣，我想將在臺灣感受到的滿滿溫暖傳遞下去，傳送到全世界。因此，親切的臺灣人創造了現在的我，讓我找到了一生的夢想，也讓我的生命增添了豐富的色彩。

台湾の温かさ

あなたは台湾に対してどのような印象を持っていますか？ 例えばマッサージ、夜市、お寺、美食など、人によって様々な印象を持っていると思います。私の台湾への印象は「温かい」です。台湾は一年を通し気温が高く、暖かいですが、今私の言っている「温かい」は天気ではありません。台湾人の、親切で温かい心のことです。

私は今までに3回台湾を訪れていますが、毎回台湾人のひとの好さを感じられます。一回目は、父母と台湾に旅行に行った時のことです。私の家族はみんな日本人のため、日本語でずっと話していました。私たちがご飯を食べようとお店に入ったところ、店員が私たちが日本から来たことに気づき、わざわざこっちに来て慣れない日本語でメニューを説明してくれました。感動が止まらないのと同時に、私の心に深い印象が残りました。

さらにもう一回、中学の修学旅行で台湾に行った時のことです。友達と夜市のお土産店に行った際、あるおばさんが「Are you Japanese?」と声をかけてくれました。「Yes. でも中国語も話せますよ!」と答えたところ、おばさんは私たちに合わせた速度でゆっくり、一字一句分かりやすく話してくれて、私たちに台湾人の親切さを感じさせてくれました。台湾という国は、このような優しくておおらかな人がいるから、旅行者の心をも温めてくれるのだと感じました。

このように、たとえどこの国の観光客でも、台湾人は両手を広げて、温かく歓迎してくれます。そこで改めて考えてみました。自分だったらどう？ 訪日外国人に何かしてあげられているの？ もし困っている外国人を見かけたら、助けに行ける？台湾で感じた温かさから、私は大きな啓発を受けました。きっと、以前の私なら言葉が通じないことが怖くて、外国人と話すことや彼ら自身を自分から離していたと思います。ですが、台湾での経験は私に「多文化を受け入れる」ことを教えてくれ、そして、一つの種が私の心の中で芽を出しました。

私には夢があります。それは、日本の魅力を世界に発信し、もっと多くの人に日本を好きになってもらうことです。私は幼いころから他国の言語や文化に興味がありました。そんな私がこの夢を持った理由は、台湾で外国人と交流することの楽しさを身をもって感じることができたからです。私が台湾で感じた温かさを、次は私が世界に発信していきたいと思っています。台湾人は今の私を作り、私の一生の夢を見つけてくれたのと同時に、私の生命に豊かな彩りを加えてくれたのです。

スピーチ部門
優秀賞

●髙橋 志織　宇都宮大学 4年

從「波麗路」學習到多文化共生

大家好。請問各位是否認識廖水來先生？在西餐廳還沒有傳入台灣的時候，他就前往日本拜師並開辦雜誌不斷鑽研廚藝。勇於創新的他，在台北的大稻埕開了一間名叫「波麗路」的西餐廳。「波麗路」至今已有80年的歷史，它深受台灣大眾的喜愛。我認為，廖先生在某種程度上代表著臺灣的多元文化。

大學3年級的時候，我前往臺灣留學一年。期間，我除了日常的學習外，我還在保存日治時期的歷史性建築、振興地區的NPO組織實習。我對於臺灣的歷史性建築和在其中生活過的人 抱有濃厚的興趣。所以，在回到日本後，我選擇了以具有歷史價值的臺灣咖啡廳作為畢業論文 論文的研究方向。通過調查，我了解到了「波麗路」具有十分重要的歷史意義。那時候，在大 稻埕由日本傳來的咖啡廳概念中加入了新元素後，衍生出各式各樣的咖啡廳。在眾多咖啡廳中，「波麗路」仍然顯露出其獨特的一面。因為它不僅是正統的西餐廳，而且「波麗路」還成為了日臺交流的重要橋樑。「波麗路」的老闆廖水來，通過立足日臺關係與關懷中國而成為了對世 界有深刻理解的人。透過精心打造後的波麗路餐廳，現在由臺灣文化部文化資產局認定為國家文化資產。作為1930年代臺北有名的西餐廳之一，「波麗路」也象征了臺灣西化的進程。

在臺灣實習期間，我遇到的每一位大人物，他們都有各自不同的文化背景，卻對所以事物 抱有相同的態度。那就是SGDs所說的「絕不讓任何人落單」的概念。這也是我的母校所宣揚的教育理念。但我是到了臺灣後才深刻體驗到何為「絕不讓任何人落單」。

如今，日台之間有許多的商業、文化交流，另一方面最近日本也開始報導臺灣的永續發展。從報導的內容了解到日本從臺灣可以學習到的地方還有很多，但我認為這些報導的資訊很有限。在臺灣這個充滿多元文化的國度，我慶幸遇到了許多人和事，讓我了解到自己還有許多要學習的地方。跟廖先生一樣，不僅局限在日本跟臺灣而應該把視野面向全世界。現在的我能 力還不足夠，所以計劃先在日本工作一段時間，汲取更多的經驗，培養更好的能力。不久的將來，我將再次回到臺灣開創屬於自己的新天地。

「ボレロ」から学ぶ多文化共生

皆さんは廖水來さんをご存知でしょうか。彼は台湾にまだ西洋レストランがない頃、台北の大稻埕に「ボレロ」という西洋レストランを開設しました。ボレロは現在まで80年もの歴史をもち、台湾大衆に深く愛されている店です。私は廖さんこそ、台湾の多元文化を表す人物であると考えています。

大学3年生の時、私は台湾へ1年間留学をしました。その際、交換留学先の学校における学習のほか、日本統治時代の建築物を保存し、それらを利用して地域振興を進めるNPOでインターンシップを行いました。そして台湾の歴史的建築物やその中にいる人々に関心を持ち、帰国後には、「台湾のカフェ」をテーマに卒業研究に取り組みました。研究を進めるなかで、ボレロが非常に重要な店であることを知りました。当時の大稻埕には、日本から持ち込まれたカフェ概念に新たな要素が付け加わり、多元的なカフェが生み出されていきます。そのなかでもボレロは、本格的な西洋料理店であるだけでなく、日台の架け橋という重要な位置にある店でした。廖さんは日台に足を置きながらも、中国を通じて世界を見ている人でした。ボレロは現在、台湾文化部文化資産局によって、国家文化資産に認定されています。ボレロは台湾の西洋化を表すものの1つでもあるのです。

インターンシップのなかで私が出会う人々は、各々異なる文化背景を持ちつつも、全ての事物に対して対等な立場にいました。これこそ、SDGsが掲げる「誰一人取り残さない」の概念だと思います。この概念は私の大学でも取り上げられていますが、台湾での経験を経て、やっとその概念が如何なるものであるのかが分かりました。

今日の日台間には多くの商業や文化交流がありますが、その一方で、日本では最近、台湾のまちづくりについて報道され始めています。その報道では、日本が台湾に学ぶべきことが未だ多くあると言われていますが、これらの報道は非常に限定的であるように思います。多元文化をもつ台湾で出会った多くの人々が、私には未だ学ぶべきことが多くあると気づかせてくれました。廖さんのように、日本や台湾だけに留まることなく、世界に視野を向ける人になりたいと考えています。しかし現在の私には能力が欠けているため、まず日本で就職をし、様々な能力を身に付けた上で、台湾で物事を繋ぎ合わせられる人物として働きたいと考えています。

スピーチ部門
優秀賞

●南雲 怜花　光塩女子学院高等科 3年

我在台灣讀書的決意

我高中一年級的時候決定了去台灣念大學。為了留學生活能夠順順利利地，所以我到現在也很努力地學習中文。我有兩個想去台灣念大學的理由。第一個是因為想學中醫。我一直對醫學很有興趣，但是隨著我自學關於醫學相關的知識，我對積累許多傳統知識的中醫更有興趣。第二個是因為受到爸爸在台灣工作的影響，開始對台灣和學習中文產生興趣。儘管在日本的大學也能學習中文，但是我不僅把中文當作一種語言，更想獲得只有學習中文後才能獲得的專業知識。許多朋友和其他人常常問我：「為什麼你選擇台灣？」「如果你想學習中醫的話在中國也可以學習。」因此，我想說明讓我選擇台灣，而且永遠忘不了的際遇。

四年前，我和父母一起去墾丁旅行。墾丁位於台灣最南端，所以從高雄要搭兩個小時左右的高速客運。起初，客運行駛地很平穩，但是速度漸漸變慢，警報也響起來了。我開始變得很不安。二十分鐘後，我們的客運被一輛晚點離開的客運超過了。這時候的客運內騷動起來，但是我完全聽不懂人們在說什麼，所以我越來越不安。就在這個時候，因為理解我們好像很擔心的樣子，所以有兩位坐在我們的後面的台灣女生，用英文仔細說明了當時的情況。此後，客運又平穩地行駛，但是又突然停了下來。但是每每發生這樣的事情時，她們都很仔細地跟我們說明，所以我們能夠安心地抵達墾丁。當時我不會說中文，但是我盡可能地用簡單的英文對她們傳達了謝意。

那個在墾丁的際遇讓我和台灣有了強烈的連結。我想作為日本的代表讓台灣人瞭解日本的美好的地方，而且我更想為台日交流盡一份心力。一般來說，大多數日本留學生去留學後會開始在日本工作。但是為了更深入地瞭解、畢業後我還是想留在台灣學很多事情。還有我想幫助正在因病受苦的人，同時將中醫好的技術和優點推廣到更多中醫還不普及的地方。

台湾で学ぶ事への私の決意

私は高校1年生の時に台湾へ留学する事を決めました。留学生活を順調に進めるため、今まで中国語の勉強に力を注いできました。私が台湾の大学で学ぶ事を決めた１つ目の理由は中医学を学びたいからです。以前から医学に興味はありましたが、歴史的かつ文化的に積み上げられてきた伝統的な中医学に強い関心を持つに至りました。２つ目の理由は父が台湾で仕事をしている影響を受けて、台湾に関心を持つと共に、中国語を学ぶことにとても興味を持ったからです。日本の大学でも中国語を勉強出来ます。しかし私は、語学として中国語を勉強するに留まらず、中国語を学んだからこそ習得できる専門性を獲得したいと考えました。しかし友人など沢山の人から「なぜ台湾を選んだの？」「中医学を学びたいのなら中国でもいいんじゃないの？」とよく言われます。これから、私が台湾を選ぶきっかけとなった心に残るエピソードを紹介したいと思います。

4年前に両親と墾丁へ旅行に行った時のことです。墾丁は台湾の最南端にあり、高雄から2時間ほど高速バスで移動する必要がありました。最初は順調に運行していたバスでしたが、次第にスピードが遅くなったり速くなったり警告音が鳴り続け、私は不安でいっぱいになりました。20分後には、後から出発したはずのバスに追い抜かれ、やはり何かがおかしいと思った時にバスが急停車しました。バス内が騒然しましたが、私は周りの人たちが何を言っているのかまったく理解できず、私の不安はより強まりました。まさにその時、私たちの不安な様子を察し、後ろに座っていた2人の台湾人の女の子が英語で丁寧に状況を説明してくれました。その後もバスは動いたり急に止まったりを繰り返していたのですが、何かが起こる度に毎回丁寧に説明をしてくれ、無事に墾丁に到着しました。私は当時中国語を話すことができませんでしたが、簡単な英語で一生懸命にお礼を伝えようとしたことが、思い出されます。

墾丁での出会いが私を強く台湾へ結びつけてくれました。留学してからは私自身が日本の代表となり、台湾の方々に日本の素晴らしさを伝えたいです。また、台日交流に少しでも貢献したいと思います。

一般的に、多くの留学生は海外で学んだ後、日本に戻り仕事をする人が多いと思います。しかし私は長い時間をかけ中医学の理解を深めるため卒業後も台湾に残り沢山の事を学びたいです。そして、中医学を活用し可能な限り沢山の病に苦しんでいる人の力になりたいと思います。

スピーチ部門
優秀賞

●根本 順　東京都立深川高等学校 3年

日臺和家族的過去·現在·未來

我的媽媽是臺灣人，大學畢業後來日本已經25年了。有一陣子我問她:「妳為什麼會來日本？ 如果在臺灣生活的話，妳就不會那麼辛苦。」她說「那是因為你曾祖母與日本的緣分的關係。」因此，我想說一說我曾祖母與日本的緣分。

曾祖母是臺東的地主，同時也當日語老師，聽到這件事我並沒有什麼特別感覺。後來有機會和一位老師聊到這件事，老師驚訝的說:「你的曾祖母真厲害，那個時代能當日語老師的臺灣人很少。」我這才知道曾祖母當日語老師是非常厲害的事情。當時，就連亞洲最發達的日本，知識份子其實也不多，同時在儒教思想影響下的日本，教師這個職業是受大家所尊敬的，更何況還是臺灣本地人當上日語教師，曾祖母本身一定做了許多的努力。戰後，日語老師被學校趕出來了之後，她就開始經營提供給從日本調來臺北的上班族們的長租公寓，她身為房東幫助日本上班族，繼續跟日本保持著関係。

有了這些緣份，我媽對日本產生興趣，後來來日本留學，最後移民到日本生下了哥哥和我。而現在我決定要去臺灣留學，將來也計劃在臺灣居住。

我會計劃移民臺灣，是因為我捨不得丟掉這個緣份。大部分的親戚都在臺灣，但是年輕一代的我和哥哥，表姊、表哥都住在國外。現在回臺灣的話，能常常見到阿公、阿嬤和其他親戚。住在他們家並不會不自在，但是等上一輩都走了，年輕一代想回來臺灣，卻沒有人住在臺灣的話，他們就會失去了臺灣這個歸處，親戚的緣份也會消失。我不希望有那些事情發生，所以如果我定居在臺灣，他們就可以很自然地回臺灣，臺灣就還是會繼續是親戚交流的轉運站。

我是以臺灣小孩的身分出生，以一個日本人的身分長大。因此對我來說臺灣和日本都是可以說是我的家鄉。在近幾年開始越來越混亂的世界情勢中，我不能容許臺日的關係受到什麼影響。我希望可以把曾祖母與日本建立的緣份繼續傳承下去。如此一來也可以讓我的下一代也理解並傳承，甚至建立更良好的關係。我相信這是我最能做好的臺日交流的貢獻。

日台と家族の過去・現在・未来について

私の母は台湾人です。彼女は大学を卒業後日本に来て25年となりました。ある時私は彼女に「あなたはなぜ日本に来たの？もしも台湾で生活していたらこんなに苦労する必要なかったでしょう？」と尋ねたところ彼女は「それはあなたのひいおばあちゃんが日本と縁があったからよ。」と言いました。なので私の曽祖母と日本の縁について話そうと思います。

曽祖母は台東の地主であり、同時に彼女は日本語教師でもありました。最初に聞いた時私は特に何も思わなかったのですが、のちに先生とこの事について話す機会があり、先生にとても驚かれながら「あなたの曽祖母はすごいですね、その時代に日本語教師になれる人は少なかったんですよ。」と言われてようやく日本語教師だったということがとてもすごい事であったのを知りました。当時、アジアで最も発展していた日本ですら知識人はそう多くおらず、ましてや儒教の影響がある日本において教師という職業は尊敬されていました。ましては本土の人の方ですら教師にはなりづらかったことを考えれば、並大抵ではない努力だったと思います。戦後、日本語教師が学校から追いやられた後、日本から転勤で台北にきたサラリーマンなどの人に提供されるアパートを経営し、彼女は大家として彼らを助け、日本との関係を持ち続けました。

このような縁があったからこそ、私の母は日本に興味を持ち、後に日本に留学、しまいには移住して日本で兄と私を産むことになりました。そして現在私は台湾に留学することを決め、将来的には台湾で生活しようと考えています。

なぜ私が台湾移住を計画しているかというと私にはこの縁をすてるのは惜しいと思ったからです。私の親戚は殆どが台湾にいますが、若い世代である私と兄、従兄弟二人は海外に住んでいます。今、台湾に戻れば祖父や祖母、叔母にあうことができ、彼らの家に住めば不自由することもないでしょう。しかし上の世代がいなくなった後、若い世代が台湾に帰りたくても誰も台湾にいなければ、彼らの居場所はなくなり台湾に帰ってくることはないでしょうし、親戚の縁も消えてしまいます。私はそのような事態になってほしくありません。そのため私は台湾に居住する事で彼らが気軽に帰れるようにし、台湾を引き続き親戚が交流する中継地としたいと考えています。

私は台湾人の子供として生まれ、日本人として育ちました。そのため私としては日本と台湾どちらも故郷と言える国であり、この近年混迷化している世界情勢において両国の関係が悪化することを容認できません。自分は今まで先祖が繋げてきた日本と台湾のつながりを継承し発展させ次世代に繋げるべく活動することで自分の子孫が理解し引き継ぐことにより、よりよい交流関係を築かせていくことができると考えます。それが自分が最も日台交流に貢献できると私は確信しています。

作文部門
優秀賞

獅子でつながる台湾と日本

●石倉 要　松江市立八雲中学校 3年

僕は、小学3年生の頃から能楽を学んでいる。謡と言われる歌や仕舞と言われる舞、能管と呼ばれる笛を稽古している。

先月、能管の指導者槻宅先生が、僕に、

「『獅子』のお稽古を始めましょう。『獅子』は、獅子舞の『獅子』です。演目は、『石橋（しゃっきょう）』になります。」

と提案された。僕は、能楽堂で見た能『石橋』を思い出した。シテ（主人公）が背丈ほどの赤や白の頭（かしら）を激しく振る『毛振り』やジャンプする所作が浮かんだ。僕は、だんだんワクワクしてきた。

先生は、いきなり全身のエネルギーをぶつけるように能管を吹き始めた。能管から風が巻き起こるような勢いだった。吹き終わり、

「私が吹いた初めの部分は、雷のイメージです。この時、獅子は現れていません。長い静寂の後、小鼓と太鼓がゆっくり呼応し、深山幽谷に露が落ちる様を表現する。その後に獅子が現れるのです。」

と教えてくださった。

「ヒーピウリーリウリウ」僕も吹いてみた。天を揺るがす初めの笛の高い音（ひしぎ）がうまく出ない。何度かチャレンジした後に「ヒー」と出だしの強い音を表現できた。

「一緒に吹いてみよう。」

先生にうながされ、先生と一緒に能管を吹いた。能の舞台では、能管は一人きりだ。しかし、『獅子』の息づかいを体感するため、先生の力を借り、僕は能管に魂を吹き込んだ。

『獅子』のダイナミックさに心を奪われた僕は、獅子舞についてインターネットで調べることにした。島根にも昔から続く獅子舞がある。お正月に家で舞ってもらったこともある。獅子頭は鼻が大きく、毛は少な目。眉が太くて耳が垂れていて、チャーミングだ。それに比べ、隣県鳥取の麒麟獅子の頭は長細い。龍に近い雰囲気だ。その他、日本各地には様々な獅子舞、獅子頭があり、とてもおもしろい。能の獅子も、民俗芸能の獅子も人々の自然への畏敬の念や感謝の念、幸福感であふれている。

海外ではどうだろうか。僕は海外の獅子舞について調べてみた。ヒットしたのは、台湾の獅子舞。台湾というと、コンピューターなどの最先端の技術が盛んな地、というイメージだったが、日本と同じように様々な種類の獅子舞があって驚いた。獅子頭や胴の大きさにもバラエティーがあり、一人で演じるタイプ、二人で演じるタイプなど様々だ。アクロバティックな獅子舞では、獅子を操る二人組が肩の上に立って演技をしたり、細く高い柱の上を移動したりするなど、息を飲むような技だった。獅子頭はかなり大きく、大きな目とまばたきが観客を引き付けていた。演奏される音楽にも驚かされた。獅子舞は、海を渡り、台湾、日本の人々に幸せをもたらしていることがわかった。お祝いの行事にぴったりだ。「世界はつながっている!」僕は、叫びたくなった。そして、『獅子』を吹く新たな喜びが生まれ、能管を台湾で演奏してみたいと思った。

ところで、台湾の人々は能楽『石橋』をご存知なのだろうか。調べると「台湾に能舞台があった」という研究があった。その能舞台を作った大村武先生の旧居の一部は現在もお店として利用されている。シテ方として活躍されている息子さんの定先生にインタビューすると、能舞台があったお父さんの旧居に実際に行った時、台湾で能楽を広めようとしたお父さんの意気込みにふれ、とても感慨深かったそうだ。残念ながら、武先生は日本人を中心に指導されていたとのことだったので、能楽の『石橋』を知る台湾の人は少ないと思われた。

今、台湾では、日本の文化を好きだと言ってくれる人がたくさんいる。日本人が台湾にいた頃日本文化が好きになってくれた人、近年のアニメなどのサブカルチャーが好きになってくれた人など年代も様々だ。台湾と日本の文化が二つの地を友情で結んでいる。あの東日本大震災の時にだって、たくさんの台湾の方が日本を応援してくれた。

僕には、提案がある。「ぜひ、台湾の獅子舞と能楽の『石橋』の両方を見てください! 長い歴史の中で台湾や日本の人々が大切にし、受け継いできた獅子を見ながら、一緒に考え、語り合いましょう!」

台湾と日本の文化の古くからのつながりを一緒に考えることで、互いの地が島国となった太古の昔からの友情を確かなものできるに違いない。いつか僕は、稽古を重ね、台湾の獅子と共演したい。台湾の自然の中で共演することで、互いに育った地に根付く歴史や友情を肌で感じることができると思う。本物の舞台でしか伝わらない息遣いや音を互いに感じ合い、台湾と日本の新しい絆を結びたいと願っている。

<参考文献>　王冬蘭「日本統治下台湾における能舞台」2017.11.12　六麓会11月例会

作文部門
優秀賞

「架け橋をつくる」

●岩松 端　芝浦工業大学 3年

「自分が作ったものが死んだ後に残り続ける」この魅力に惹かれて私は建築を始めました。私は今大学3年生で建築を専攻しています。大学に入学した当初は漠然と「自分のデザインしたかっこいい建築で人々を驚かせたい。」という思いで建築とは向き合っていました。

今年の夏、そんな私の考え方を変える転機が訪れました。建築のプロジェクトで台湾に短期留学にいきました。はじめての留学でしたが台湾の人々はとても温かく迎えてくれました。中には日本のことが大好きだと言い、私たちが分からないことがあると日本語で丁寧に教えてくれる人もいました。なぜ台湾の人はこんなに日本人に優しいのだろうと思うぐらいでした。不思議な出来事はまだまだ続くのでした。ある時プロジェクトの仲間と街中を歩いているとマンションの入居者募集の看板に部屋の広さを表す単位として「坪」が使われていたことでした。「坪」とはもともと日本の畳を使った広さを表す単位です。「ここは台湾なのにどうして？」私は疑問に思い友人に尋ねました。「1945年まで台湾が日本に統治されていた名残なのよ。」そう言っていました。「やはり変だな。」私はさらに不思議が深まった気がしました。日本に統治されていたことをなんの躊躇もなく日本人に話し、さらに温かく接してくれる。そんな背景には何があったのかが気になりました。

日本に帰り本やニュース、台湾に着いて詳しい人に話を聞き調べていると、台湾のために尽くした日本人の存在を知りました。そのうちの一人が八田與一という方です。彼は1930年台湾に当時東洋一の大きさを誇る烏山頭ダムと無数の用水路をおよそ10年もの歳月かけて作り上げました。彼を動かしたのは日々の食糧、飲料水に事欠く農民の生活環境でした。この劣悪な環境、不毛の大地を緑豊かな穀倉地帯に変えたい、という意思で数々の難題や爆発事故に遭いながらも10年間動き続けたのです。その与える精神に私は感動しました。そのダムの完成後は地元の農民たちの熱望により八田技師の銅像が設置されました。1944年戦況が緊迫し物資不足となり銅像も回収されそうになるなかで地元農民たちは必死に銅像を隠し守り続けたそうです。「そうか、台湾の人が優しくしてくれたのは、こういう人々のおかげだったのかもしれない。」と、私はハッとしました。

しかし、2017年この八田技師の銅像の頭部が何者かにより切り取られ持ち去られてしまっていたのです。どうしてこんなことが起こってしまったのか私には理解が出来ませんでした。さらに調べると一方で日本のことをよく思わない人もいることを知りました。「当時から守り続けられていたものがこんなにも簡単に壊されてしまうのか。」なんだか虚しくなり、「こうやって歴史というものは忘れ去られていくのだろうか」とすらも思いました。そしてこのような台湾と日本をつなぐ架け橋は無くなっていきそれがさも初めから無かったかのように対立し始めるかもしれません。そうして都合の良いままに歴史が解釈され、先人たちが懸命に生きてきた歴史が今生きている人々によって塗り替え変えられてしまうかもしれません。そんな未来を私は望みません。

では私には何ができるでしょうか。当初は「かっこいい建築を建てて人々を驚かせたい。」そう思っていた私ですが、この台湾留学で建築家として未来に残せるものを本気で考えるようになっていました。そこで本当に残すべきものが見えてきました。それは日本と深く関わってきた台湾のような国との間に起きた出来事、そこに関わった人々の歴史です。それを空間に閉じ込めたいのです。歴史と言っても様々で明るい歴史や当然悲しい歴史もたくさんあります。ですがそのありのままの姿の過去を建築の力を借りて未来に残していくのです。簡単に人の手では破壊されたり持ち去られたりしない残していきたくなる風景、日本と他の国を繋ぐ架け橋を建築のちからで生み出していきたいのです。

訪れる人々が「そうか、こんな歴史があったのか。今自分がこうやって生きている背景にはこんな出来事があったのか。」と思い、それを肌で感じ、そうすることで自ずと台湾との歴史や繋がりを認識することができるはずです。そうすると今起きている台湾、そして中国などの問題に対する見方が変わってくる、関心を持つようになる人々が増えてくるはずです。そして、そこに生まれる人々の意識こそきっと今わずかに残っている繋がりをより強くより長く残していく架け橋になると私は思います。これが私のできることです。

作文部門
優秀賞

謝謝台湾

●小川 友希　東京都立立川国際中等教育学校 3年

私は一人っ子で、ずっと妹や弟が欲しかった。どうしてか、と明確な理由を訊かれたら、分からない。一人っ子の人はみんなそう思うのかもしれない。それか、寂しいのかもしれない。十五歳になって、姉になることを諦めてなお、分からないでいた。

とはいえ、最近気付いたことがある。たぶん私は、本当は子どもが好きなのだ。気付いたきっかけは、母の起業だ。母は二十年務めた一般企業を辞め、去年三月、海外の遊具の販売に関わる会社を作った。母がデンマークに遊具の視察に行ったとき、私も同行したが、お城や動物を模した遊具で遊ぶデンマークの子どもたちを見ていて、愛しさのような感情が湧き出たのを覚えている。見ず知らずの子どもに対して愛しさ、とは少し変に感じるかもしれない。けれど名前も知らない子が元気に遊ぶのを見て、私の心の奥にじわっと広がった暖かなもの、それは確かに愛情だった。

母は、自分の携わる遊具を通して、障がいのある子どもも、ない子どもも楽しめる、インクルーシブ公園の実現を目指している。私は、どんな小さなチャンスも逃さぬよう、地道に努力を重ねて、熱意をもって仕事をする母を、深く尊敬している。そんな母のおかげで、私は障がいのある方に寄り添うための社会福祉に関心を持つようになった。私は、どんな違いのある人でも社会に包み込み、共に支え合っていける社会、ソーシャルインクルージョンの理念に基づいた社会を築けたら素晴らしいのではないかと考えている。

以前、インターネット上で、台湾で物乞いをする人々の記事を読んだ。身体的障害などによって職に就けない状態になってしまっている方が、道に座り、お金を集める小箱を自分の前において頭を上下させている。中にはそれを職業と捉えている方もいる。台湾ではそれが珍しくない光景なのだ、というその記事を見て、私は非常に驚いた。それがきっかけで私は台湾の障がい者福祉について、調べてみようと思った。

台湾の障がい者福祉の制度について調べたときに、私が一番面白いと思ったのは、台湾における発達障害教育で、ギフテッド教育要素を取り入れられているという点だ。子どもたちのそれぞれの個性、特性を伸ばせる教育制度があることが印象的だった。どんなに人と違っていても自分の長所を大切にすれば良い。同じ人間なんて、いるはずがないのだから。

もう一つ、興味を持ったのは障がい者雇用についてだ。台湾では、障がい者権利保護法で、六十七人以上の従業員がいる雇用主は、障がいのある人を積極的に雇用することが義務付けられている。また、同法律は、障がいのある従業員が、従業員の総人口の一パーセント以上を占めることを要求している。障がい者雇用を促進するためには、このように政府が法律を作ることによって介入することが不可欠だが、それに加えて、私は障がいのある方のための職業訓練の場を整えること、障がいのある方の学習の機会均等を徹底することが鍵だと考える。

台湾と日本は、歴史的なつながりが深く、共に協力して繁栄してきた。そのつながりを、障がい者福祉の充実のために生かせないだろうか。私は障がい者福祉を通して、日本と台湾の懸け橋になりたい。

私は一人っ子で、ずっと妹や弟が欲しかった。姉になることを諦めていた十五歳の冬、その子の存在を知った。私の、妹の存在を。

私の両親は離婚し、父は再婚して新たな家庭を築いていた。その父が、女の子の養子をもらっていたことが分かったのだ。「その子は、友希の代わりにもらった子じゃないよ」と父が言ってくれた。だから私は、私の分身ではなく、身代わりでもなく、その子を純粋に妹として愛することができる。

その子は障がいを持っている。けれどそれが、私のその子に対する愛情にどう影響するというのか。

一人ひとり違っている人々が、共に支えあって暮らせる、共生社会を、台湾と日本で築くために、今の私ができること。それは、さらに台湾について知って、台湾と日本の障がい者福祉の未来を考えること。

私にできることは、ちっぽけなことかもしれない。けれど、私は常に、周りに意見を発信していきたい。ちっぽけでも、続ければ大きな力になると私は信じている。台湾と日本が、どんなに小さな努力も惜しまず積み重ねて、友好関係を築き、共に歩んできたとを知っているから。

りおちゃん、私は頑張ります。私を姉にしてくれて、ありがとう。

＜参考資料＞　LEXOLOGY
https://www.lexology.com/

台湾のことを話そう
https://taiwannokoto.blogspot.com/

台湾における市民社会活動と宗教及び障害者福祉
ritsumeikeizai.koj.jp/koj_pdfs/64407.pdf

作文部門
優秀賞

違和感という役割を担う

●下條 円雅　学習院女子高等科 2年

タピオカとマイクロプラスチック。最近日本で聞くことが増えた二つの言葉は、一見全く無関係であるようにも見える。しかし、私の中でこの2つは密接な関わりを持つものとして確かに存在している。

きっかけは、台湾に関するあるニュースをテレビで見たことだった。今年の7月、何気なく見ていた報道番組のアナウンサーの声が伝えた「台湾の飲食店でプラスチックストローの提供が禁止される条例が施行された」というニュース。これを見た時、昨年家族旅行で台湾を訪れた私にはすぐにこんな疑問が浮かんだ。「台湾で広く普及しているタピオカに不可欠なストローの規制などできるのだろうか？」。気になって調べてみると、台湾では携帯ストローが浸透しつつあるようだと分かった。ステンレス製やゴム製で、普段から鞄に入れて持ち歩き使う度に洗う。プラストローは店から提供されないが、これを使って飲み物を楽しむ。環境への配慮に感嘆したところで思い出したのが、家族旅行で訪れた台湾での光景だ。日本よりも遥かに多くのタピオカ店があり沢山の人がタピオカドリンクを飲んでいるのに、日本に比べポイ捨てなどゴミが散乱している状況を殆ど見なかったのである。私が日本で訪れたタピオカ店の周りにはプラカップが散乱し、中身が半分以上残っているものも放置されていたのだ。この違いは、何によるものなのだろうか。

台湾の環境に対する意識は日本よりも遥かに高く、リサイクル率では世界二位を誇る。当局もプラストロー禁止の条例を施行するなど環境保護を推進しており、2030年までにプラスチック容器を全面廃止することが目標となっている。そもそもプラストロー禁止の条例の目的は、プラスチックごみの排出削減だ。プラスチックごみは海洋へ流出すると船の航行や漁業などに大きな悪影響を与える。さらに、流出したプラスチックが細かい破片となって海中を浮遊する。これが現在世界を悩ませている「マイクロプラスチック問題」なのだ。このマイクロプラスチックは大きさ5ミリ以下と小さいものの、生態系への影響を懸念する声も多い。例えばマイクロプラスチックが体内に入った魚を私たちが食べれば、プラスチック由来の有害物質が体内に蓄積し悪影響を及ぼす可能性もある。そのため、世界中ではプラスチックごみの削減が叫ばれているのだ。台湾はプラスチックごみ対策に熱心に取り組んでおり、当局の政策の台湾の人々への浸透は、携帯ストローなどの普及に繋がっているのだろう。

一方で日本のことを考えずにはいられない。日本はプラスチックごみへの対策に乗り出してはいるものの、台湾のように条例や明確な目標はなく、私はこの事が日本人の意識の低さにも繋がっていると思う。道を歩けば多くのポイ捨てされたゴミがある。タピオカ店周辺での中身が残ったプラカップの放置には、日本独自の言葉として世界に広まった「勿体無い」がそのまま返ってきそうな有様だ。海洋からの影響が大きい島国であることは日本と同じである台湾の取り組みとは対照的に、日本は驚くほど環境問題への意識が低いことを感じざるを得ない。

私は幼い頃海が身近にある環境に育ったため、美しい海を保ちたいという気持ちは人一倍強い。日本も、プラスチックごみの排出に対する危機意識を個々で高めるべきだと思う。その助けになることは何かできないかと考えた結果が、今私の手元にある一本のストローだ。このステンレス製の携帯ストローは全国展開の雑貨店で買ったもので、値段も700円程と手頃だ。これを使い始めることが環境問題への取り組みの一端になると私は考えた。

例えば友人と飲食店に入ったとき、私がストローの提供を断りこれを使っていたら確実に友人は違和感を覚えるだろう。それこそが狙いである。私がタピオカと台湾の条例という関係性の全くなさそうなところから環境問題やマイクロプラスチックに関する気づきに辿り着いたように、私が違和感を抱かせる役割を担うことにより、私の周囲の人々にも環境問題への気づきや関心へと繋がる道を切り開けないだろうか。私の携帯ストローに対する違和感は友人のみならず、私が人と違うストローを持っていることについて気づいた周囲の人にも植え付けられる。人と違うことに敏感な現代人にとって「違和感」は特別なものであり、もしその人が手元のスマートフォンで携帯ストローについて調べたら、携帯ストローのユーザーや台湾の環境対策に関心を持つ人を増やすことができるかもしれない。

この手元のストローは、私の周りの誰かの興味や関心に繋がりうる。台湾を調べて知った環境対策に取り組む姿勢は、私に小さなことでもアクションを起こす勇気をくれた。台湾を旅した時の気づきと偶然見た台湾のニュースは、私の考えをこんなにも深めてくれるきっかけになった。小さな気づきが深い考えに繋がりうると気づかせてくれた台湾に感謝したい。

作文部門
優秀賞

民主主義の砦・台湾　～日台連帯に向けて～

●関本 晃希　立教新座高等学校 2年

2019年、逃亡犯条例改悪に反対する二百万もの香港市民の声が、世界に伝わったのは記憶に新しい。もし法案が議会を通れば、「犯罪者」とされた人々が中国に引き渡されてしまうため、反中国的な言動をする人々の身に危険が迫り、香港での言論の自由は危機に晒される。そのため、東アジアから民主主義の灯火が消されようとするのを断固阻止せんと、志ある市民が立ち上がったのだ。彼らはデモをし、大学に籠城し、弾圧を加える官憲に対し日々闘争を繰り広げた。その姿は、同じ10代の私に、強い衝撃を与えるものであった。

私は、日本と世界の歴史について深い関心があり、読書などを通じて学んできたが、上記の香港のみならず、東アジアには、日本と民主主義、自由主義的理念を共有できる国がある。それが、台湾だ。

台湾と日本との関わりの歴史は古い。台湾で現在も英雄として名高い、17世紀の反清復明運動の指導者・鄭成功の、母は日本人である。そして、江戸時代の日本にも鄭成功の奮戦は伝わり、「国姓爺合戦」として近松門左衛門による人形浄瑠璃の作品ともなった。その後、19世紀末に、日清戦争後の日本は、台湾を併合した。現地では当初、日本に対する抵抗運動もあったが、日本が旧慣温存策を取り、文化政治へと転換したことから、次第に調和した。そして、現地では日本人が台湾の近代化に努めた。例えば、新渡戸稲造は台湾での砂糖生産の発展に尽力し、八田與一は烏山頭ダムを建設し、両者とも今も住民に敬愛されている。また、日本は教育にも力を入れ、台北帝国大学を初めとして、多くの教育機関を建設した。さらに、先の大戦では、台湾高砂族のように、台湾の若者が日本兵として参戦した歴史がある。そして、李登輝元総統が日本統治に対して肯定的であるように、多くの台湾の識者が日本統治時代を台湾近代化の礎として高く評価している。

しかし、1972年に、日本は中国との国交樹立のため、日華平和条約を破棄し、台湾と断交してしまった。そして日本は、本来は国家である台湾を、国家として承認していない。さらに、長い友好の歴史があったにも拘らず、台湾が国際的に困難な立場に立った時に、日本がその解消に努めたという話も聞かない。現在、韓国と北朝鮮が同一民族で2議席を有する国連に、台湾は議席を有しておらず、オリンピックにも「チャイニーズ・タイペイ」という名称でしか出場できない。そのように国際的に不利な立場に立たされた台湾のために、日本はもっとできることがあるはずだ。

台湾は漢民族だから、中国と同じだ、という意見がある。だが、本当にそうだろうか。司馬遼太郎氏と李登輝氏との対談（『台湾紀行』）から考えてみたい。司馬氏によると、シンガポールの李光耀氏は、豪州を訪れた時、「豪州人が自らを英国人と思わないように、シンガポール人も、自らを中国人とは思わない」という趣旨のことを述べたそうだ。そして、司馬氏は、「漢民族であっても、台湾は台湾人の国ですね」と締めくくっている。全く同感だ。同じ漢民族とはいえ、海を隔てて、全く違う環境の中で、長い歴史を経てきたのだから。

台湾の高齢者には日本語が達者である方が多く、街には日本製品が溢れているという。また、両国の民間人有志による交流も活発だ。さらに、東日本大震災の後には、台湾から総額250億円もの義捐金が寄せられたという。その義捐金を寄せて下さった中に実業家の張榮發氏がいる。張氏は、日本統治時代を経験した人物であり、個人で10億円もの義捐金を寄せられたそうだ。このように、正規の国交が無くとも、台湾と日本とは強い絆で結ばれている。ならば、それを一段と高い関係に昇華させるべきだ。

さて、2020年の1月11日夜、蔡英文総統再選の報が入ってきた。蔡氏は、親日派として知られるし、中国による南沙諸島への軍事侵出を批判したり、北朝鮮に経済制裁を課したりするなど、行動力のある頼もしい政治家である。今後の日台関係は、安定が続きそうであり、喜ばしいことだ。

現在の東アジアには、チベットやウイグルで人権を蹂躙する隣国があり、香港や台湾、さらには尖閣諸島に、その触手を伸ばそうとしている。そんな中で、私たち日本人は、民主主義や基本的人権の尊重などの理念を共有できる台湾との友好を一層深化させるべきだろう。そして、台湾との一刻も早い国交回復に向けて邁進していく必要がある。言論・信教の自由が守られ、人権が尊重され、人々が安心して暮らせる平和な社会の実現を、私は心から願っている。民主主義の砦である台湾と日本との連帯に向けて、将来何か貢献できるように、これから見聞を広め、もっと学んでいきたいと、私は強く思っている。

作文部門
優秀賞

ジョイと繋ぐ日台のフューチャー

●沼上 楽　加藤学園暁秀高等学校 1年

私にとって台湾は第二の家族のいる場所だ。私には翁以柔（ニックネームはJoy）という友達が台湾にいる。彼女は一昨年、日本研修に来た時に私の家にホームステイをした。私たち家族はJoyを箱根に連れて行ったり、うどんを一緒に食べたりし、色々な体験をさせ日本のことを知ってもらった。彼女が台湾に帰ってからも連絡を取り続け、日本や台湾の文化について電話で何度か通話もした。

Joyがホームステイに来た時のことで、私が一番鮮明に覚えているのは彼女が「台湾は中国の一部じゃない」とつぶやいたことだ。当時の私には台湾や中国に関する知識が少なく彼女に返せる言葉が見当たらなかった。私自身も台湾は独立した一つの国だと認識していた。後に調べて分かったのは、台湾問題というとても複雑な中華民国が実効支配している台湾地区の主権帰属または政治的地位に関する中華人民共和国と中華民国の政治問題が発生しているということだ。その一部の原因には日本の第二次世界大戦敗戦による台湾の主権の放棄が含まれていることが分かった。この複雑な問題を少しでも理解し、Joyのつぶやいていたことを受け止められるようになるためというのがこのプログラムに参加する動機の一つである。複雑な現状にある台湾に実際に行き、自分の目で台湾がどのような国なのかを見たい。実際に見ることで現地の人がどのような生活をしているのか、日本や中国に対してどのようなイメージや考えを持っているのかを知りたい。また、そのイメージがどのような台湾における文化や考え、日本との過去の関係に基づいているのか、そして、日本という国に対してどのような思いを台湾の人たちは抱いているのか探求したい。ただ知るだけで終わらず、日本に帰ってきた後に周りの人が誤って認識している台湾という国について正しい情報を提供し、台湾がどのような国なのかを学校でも発信していきたい。

このプログラムに参加したいもう一つの理由は、今後懸念される中国と台湾の関係を自分なりに予測し「日台とより良い関係を築くべきだ」という考えが結論として出たからだ。今後、世界一の人口を持つ中国はより大きな国になることが予想されている。技術や人材育成の向上が益々進み、やがてアメリカを追い抜くだろう。現在中国は香港を中国と同じ社会的、文化的体制や法を適応させるために統一しようとしている。香港の独立国家を目指して香港の人々は必至でデモをしているのがテレビで窺える。香港がもしこのままデモを押し倒され中国の一部になってしまった場合考えられる次の統一対象は台湾になると私は思う。力を持った中国から自国の文化や考えを守るためにもアジア諸国の一致団結が必要となってくだろう。台湾や香港そして日本といった小さな国が集まり協力や助け合いをするべきだと私は考える。そのためにもまずはお互いの国の文化や考えの類似点や相違点を知り、尊重しあうことが求められる。このプログラムを通して台湾と日本の相互の文化や考えを深めるとともに、身近な繋がりを探し出したいと思っている。なぜなら、お互いに共感できるものや共有できるものがあれば信頼関係を築いていくチャンスが生まれるからだ。例えば私が思い浮かべる台湾と日本の繋がりといえば、「千と千尋の神隠し」という日本を代表するジブリ映画だ。この映画のモデルとなっているのは台湾の九份という街だ。日本の映画を代表するジブリの名作と台湾の九份という美しい場所が掛け合わさることで台湾と日本の繋がりを実感することができる。

このように、日台の文化や考えがコラボレーションすることで生まれた繋がりをこのプログラムでのホームステイや台湾観光を通して見つけていきたい。また、現地の人たちとたくさんコミュニケーションを取り自国の文化や考えを発信していくとともに台湾の文化や考えをシェアし、交流を深めることで身近な台湾と日本の繋がりを見つけたい。さらに、ただ繋がりを見つけるだけではなく、そのつながり同士を自分なりにコラボレーションさせ新たな繋がりを作っていきたい。台湾と日本、それぞれ個性的で伝統的な文化や生活が存在する。お互いの美しい文化をコラボレーションすることで新しい発想やクリエティビティーが生まれ、国境を越えた隔たりのない関係を保つことにつながるだろう。

作文部門
優秀賞

令和時代に台湾万葉集を詠む

●村上 陽香　立命館慶祥高等学校 2年

昨年五月、新天皇の即位にあわせ、「令和」へと改元された。新元号の発表後、『これまで「令」の文字が元号に使用されたことはない』と、度々報道された。私自身も「命令」や「令状」などの熟語を思いうかべ、上位者が下位者を押さえつけるようなイメージをもつ「令」をなぜ用いたのか疑問に思った。しかしながら、「令」と「和」を切り離して読み解こうとする姿勢が誤りだったのだ。

「令和」という元号は万葉集の梅花の歌第三十二首序文に由来する。

初春の令月にして、気淑く風和ぎ、梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫す

初春の素晴らしい月のもと、空気は澄み、風は和らいでいる。梅の花は美女のはたくおしろいのような色に咲き、蘭は匂い袋のようなかぐわしい匂いを漂わせている。

事実以上を描くわけではない。そこにあるものを、適切な比喩を用いて写し取るだけだ。それなのにこんなにも美しい。しかし、この詩が現代の日本で発表されたものだったらどうだろう。詩に斬新さや奥深さを求める風潮は、情景描写を軸としたこの作品に高い評価を与えないように思う。

それでは万葉集に見られるような素朴な歌は大昔の文化として廃れてしまったのかと言えば、それも違う。一九九三年に編集された台湾万葉集には、台湾の人々が率直な日本語で綴った沢山の短歌が収められている。

夜な夜なを目ざむる癖は
**　病む夫を看取りし惰性か冬の夜長し**

静まり返った夜、はっと目を覚まして隣を見ても、誰もいない。茫洋とした闇が広がっているばかりである。そしてふと気がつくのだ。夫は死んだのだった、と。

作者である高淑英さんは米問屋の一人娘として生まれた。法政大学の学生であった林慶亭さんと日本で結婚し、子育てをした。盧溝橋事件をきっかけに二人は帰台している。その後、林慶亭さんが先に天へと旅立つ。七十三歳、病死であった。生物として天寿を全うしたと言える自然な死の形だ。それでも妻の高淑英さんの悲しみは深い。そして彼女の悲しみはわたし達読者にも鋭く突き刺さる。

ここで、万葉集にある大伴旅人の歌を引用したい。

愛しき人のまきてし敷栲の
**　我が手枕をまく人あらめや**

愛しい妻は私の腕を枕にして眠ったものだ。この腕の中で眠る人にはもう二度と出会えないのだろう。

大伴旅人は約一三〇〇年前の歌人である。妻に先立たれた悲しみを端的に歌っている。

高淑英さんと大伴旅人がともに表現した最愛の人との別れ。別れはいつの時代も詩歌の重要なテーマだ。上記の二首に描かれているのは病と死が二人を隔てたものであった。そこには大きな悲しみだけがある。しかし、外的な力によって仲が引き裂かれる別れには悲しみだけではなく怒りが伴う。

臨終に会へざりし母
**　白骨となりて美しかるイメージ崩す**

母の臨終に立ち会うことはできなかった。やっと墓参りに赴いたものの、美しい母の面影はなく、ただの白骨になっていた。

東京で戦時下を生きた台湾人、張静恵さんの作品だ。十六歳のとき東京に単身で赴き、学生となった。一九四四年の夏休みに会ったのが母との最後となった。戦時下だったため通信システムが整備されておらず、母の死の報せが届くのに三か月かかった。墓参りが叶ったのはさらに二年後だった。戦争が母の臨終に立ち会うことはおろか、死に顔を見ることさえ許さなかったのだ。悲しみとともに戦争に対するやるせなさまで表現されている。

君が行く道の長手を繰り畳ね焼き滅ぼさむ
**　天の火もがも**

あなたが行く長い道のりを手繰り寄せて重ね、天の火が焼き滅ぼしてくれればいいのに。

万葉集に収められた狭野弟上娘子の歌である。彼女の夫である中臣朝臣宅守が流刑になり、もう二度と会えないことを嘆き悲しむ。

張静恵さんと狭野弟上娘子が描いた別れにも共通した怒りややるせなさがある。個人の力では到底及ばない存在に引き裂かれた運命。

上記の四首が成立した時代と場所は大きく異なる。それでも率直な言葉でありのままを表現しているという点で結ばれている。

最後に台湾万葉集から一首。

短歌詠みに仏教徒ありクリスチャンあり
**　よき短歌あれの祈りは一つ**

高淑英さんの作品である。現代の日本では評価されにくくなった実直な情景描写の美しさを台湾万葉集が教えてくれる。「令和」時代となった今は、日本人として万葉集をキーワードに短歌に触れるチャンスだ。一人でも多くの日本人が台湾万葉集の存在を知り、収められている短歌の美しさに気づくことを願っている。

作文部門
優秀賞

想いをつなぐ

●吉浜 雅　聖心女子学院高等科 2年

思わぬところに自分とのつながりがあったりする。今の私にとって台湾は、そのような思いがけない絆でつながっている場所である。ついこの間まで、私は台湾をまだ見ぬ、自分とは縁遠い土地と思っていた。しかし、最近自分と台湾のつながりを感じさせる出来事があった。

昨年、母が台湾を訪れ、一冊の大きな本を抱えて帰国した。その本は、ある台湾の学校の記念誌だった。その学校は私の高祖父が日治時代、台湾の人のために創立したところであった。母は、自分に縁のあるこの学校を訪れたいと長らく思っていたが、日本の植民地政策や日治教育という点からくるある種の後ろめたさから足を運べなかったらしい。だから、今回の訪問はかなり思い切ったものだったようだ。

学校の創立は1922年である。今さら高祖父の軌跡を辿ってもたかが知れていると思っていた。ところが、私の予想とは裏腹に、母は手厚い歓待を受けたようだ。日本から持っていった写真などを見せて話をしたところ、校長先生や教頭先生は大変喜び、来年の創立100周年記念式典に是非来て欲しいと言われたそうだ。校長先生の話によると、高祖父は在職中、生徒や父兄にも尊敬され、学校を去った時には銅像まで建てられたという。それは高祖父が職務をこなしていただけでなく、この地で人と人との交わりを大事にし、心の通った教育を目指したからではないか。今回、母の台湾渡航を経て、ぼんやりとした高祖父像に少し輪郭がついた気がした。

この出来事をきっかけに、台湾についての勉強を始めた。そして、学校の授業では表面的にしか台湾との関係をとらえられないことを実感した。教科書や資料集にある台湾の記載も少ない。私が学校で学んだのは、日本が台湾を支配下に置くまでの出来事の羅列と、現地で日本語教育をしていた、ということだけだ。私は今まで、台湾で起こった出来事を膨大な歴史上の出来事の小さなひとつとして流していた。台湾旅行の感想などは友達からやネット上で身近に知ることができるが、こんなに近くにあり、ましてや自分のルーツと関わりのある台湾に対してでさえ私は無知であったと反省した。

グローバル化や国際交流が叫ばれる時代の中で、物事のとらえ方は人や国によって異なり、何が正しいのかは相対的である。私たちは常にその真偽の判断を委ねられている。台湾と日本の歴史を考えるとき、日本の統治が植民地支配であったことは容認できることではない。差別的な行為もあっただろうが、一方で人と人との真の交流があったことも事実だ。台湾と日本の関係を含め、物事を多角的に捉えるためにも、少しでも多くの歴史的事実を学ばなくてはならない。台湾は“親日”といわれているが、どのような歴史的背景があるのか、それは正しい認識なのかを考えられないうちは、呑気な観光客から抜け出せないのではないか。また、異文化交流は文化や歴史、価値観のつながりであると共に、人と人との絆でもあることを忘れてはならない。歴史は出来事の積み重ねであるが、例えば高祖父と生徒たちの交流のように、そこには必ず人の思いが介在する。歴史という大きな視点から物事を見ると同時に、ミクロなつながり、つまり人と人のつながりをもっと大切にしようと思う。それは机上の勉強だけでは実践することはできない。SNSが発達している今は、そういったツールを生かすこともできるが、一人でも多くの人と実際に触れ合い、真の交流をしていきたい。

100年越しに私たち家族と台湾が再びつながったことを嬉しく思う。高祖父の分け隔てなく生徒を思う気持ちは受け継がれ、時空を超えて人と人をつないでくれた。誰がこんな未来を想像できただろうか。教育という未来を作る仕事に憧れて、私も将来は教育関係の仕事に就きたいと考えているが、日本と台湾の架け橋になるような存在になりたい。高祖父が、自分が蒔いた種が確かに根を張り、台湾と日本をつないで世界へと大きく成長していく様子を見守ってくれるといいな、と思う。

OBOGからの激励メッセージ

今回の受賞者へ、過去の「日台スカラシップ」を受賞したOBOGから激励のメッセージが多数届きました。
一部を抜粋して紹介します。（順不同）
※メッセージは2020年3月時点でお送りいただいたものです。

（右端の後方が橋本さん）

橋本 真那（第16回）

第17回日台文化交流青少年スカラシップの受賞者のみなさん、この度はおめでとうございます。コロナウイルスによる影響で研修旅行、授賞式共に中止になってしまったこと、とても残念に思います。私自身、みなさんにお会いできるのを楽しみにしていました。

私は現在、国立台湾芸術大学の舞踊学科に唯一の日本人として在学しています。同じくコロナの影響で公演が中止になってしまいましたが、日々の授業や創作活動を通し、沢山の刺激と学びを得ています。一歩ずつですが、日台の文化交流促進に貢献できるよう前に進んでいます。

日台スカラシップには、素敵な出会いとチャンスが詰まっています。共に受賞した仲間、支えてくださる関係者の方々、現在日台文化交流の第一線で活躍されている歴代受賞者の方々、そしてみなさんもその一人です。今回の中止のみに終わらず、同じ志を持つ仲間として、みなさんにお会いできる日を楽しみにしています。まずは今回のチケットを使って台湾という国、そして文化を肌で感じ、今後の糧にしていってほしいと思います。心から応援しています！

藤岡 竹春　（第15回）

受賞おめでとうございます♪♪

現在、台湾の大学で勉強している身としては、皆さんが一体どんなテーマでスピーチをしたのか、作文を書いたのかが非常に興味深いです。

早く皆さんの作品がネットに載らないかと心待ちにしています！

本来であれば、研修旅行の際にお会い出来るはずだったのですが、この様な形で中止になってしまったのは、とても残念で仕方ありません…

皆さんには実際に現地に来て、台湾を肌で感じて欲しかった…

突然ですが、皆さんは環島という言葉を知っていますか？

環島というのは一般的に、自転車で台湾を一周することを指します。台湾人ならば生涯において一度はやり遂げるべき三大イベントの一つでもある環島。

実は今年、私は大学の冬休みを利用して、自転車で環島してきました!!

日本から自分のロードバイクを持ち込み、2週間にわたる長期ライド。1日約100キロという長距離でしたが、台北から始まり、台湾のど真ん中に位置する南投、ご飯がとにかく美味しい台南、台湾最南端の墾丁を経て台東へ、過去に大地震のあった花蓮を通り、また台北に戻ってくる。そんな道中での出会いは魅力的なものばかりでした。自転車を漕いでいると、何人ものバイクのお兄ちゃんが通り過ぎ際に「環島加油!!」と大声で言ってくれたり、ご飯屋のおばちゃんがカタコトの日本語を喋りながらバナナをくれたりと、台湾人の優しさを感じずにはいられない旅でした。

台湾には素晴らしい場所が本当に沢山あります!! これは実際に現地に行って、その土地の人達と交流した私が確信を持って言えることなので間違いありません！

是非皆さんも台湾に来る際には、台北だけではなく、各地に足を運び、その土地の良さを実際に感じて欲しいと切に思います。

私事ばかりになってしまいましたが、改めまして皆さま、受賞おめでとうございます!!

いつの日か、スカラシップの同窓会で皆さまにお会い出来る日を楽しみにしています。

鈴木 結（第15回）

この度の受賞、誠におめでとうございます。日本と台湾を繋ぐ架け橋となる仲間にまた出会えたことを大変嬉しく思います。

新型コロナウイルスの影響により、授賞式および台湾研修旅行が見送りとなってしまったとお聞きし、私もとても残念に思います。

しかし、受賞された皆様は、事態が落ち着いてから、台湾に行く機会があることでしょう。その際はぜひ、この日台スカラシップ受賞という素晴らしい称号に思いを馳せていただきたいです。きっと一味違った台湾訪問となるのではないでしょうか。

そして、受賞されたご自身以外の仲間の台湾への思いにも、ぜひ触れてみていただきたいです。台湾を様々な角度で見ることができ、きっとご自身の知る台湾を更に知ることができるのではないでしょうか。

受賞された皆様のご活躍を、応援しております。

小向 加奈（第15回）

受賞おめでとうございます。大変な時期ではありますが、渡航することが難しいこの時に考え、思いを馳せた経験が、後に台湾に行った時にきっと活きると思っています。

私は今年から台湾で働く予定です。台湾について勉強したい、言語を学びたい、日台関係をより良くしていきたいという純粋な思いが今もあるのは、日台スカラシップに応募する時に自分の思いを文字にするため台湾について考えたことが大きく影響しています。そして日台スカラシップをきっかけに様々な方とお会いでき、思いを共有することができています。OBOG会等でみなさんと台湾についてお話しできることを楽しみにしています。

今後様々な道に進むと思いますが、どんな形であれ、是非みなさんと一緒に日台関係を盛り上げていきたいです！

Message

松岡 巧（第14回）

当時は高校2年生でしたが今は大学2年生となりました。そして2月から国立台湾大学に4ヶ月間交換留学をしています。もし研修旅行が実施されればみなさんともお会いすることが出来たのではないかと思うだけに、今回の中止は致し方無いとはいえ大変残念に思います。

ただ、研修旅行でなければ得られなかったこと、というのは恐らくこの世界にはありません。『えん』があるからです。みなさんが経験しなかったことは、巡り巡って、どこかできっと形は違えど経験したり、感じたり、出会ったりするようなことがあるはずです。そしてたとえそんな機会がなくなってしまったとしても、きっとみなさんの台湾への思いは変わらないと思います。台湾は歴史的にも、文化的にも、とても興味深い場所です。

その面白さは、どのような角度で、どのタイミングで、誰と見ても、必ず感じることができると思います。僕は今留学して、一人で来るからこそわかる台湾の空気感や温かみを感じています。

何かに興味を持って、それを解き明かす姿勢を持つことは本当に素晴らしいと思います。僕も右往左往しながらなんとか目標に向かって一歩ずつ進んでいます。ぜひ台湾が、みなさんにとって「知りたい」と思える原動力になれば、とっても嬉しく思います。今は大変な時期だと思いますが、一緒に頑張りましょう!

倉本 涼平（第12回）

受賞おめでとうございます。

私は今、台湾の国立政治大學の4年に在籍しています。

そして、台湾のコロナウイルスに対する取り組み・決断のスピード感などを肌で感じながら生活しています。

コロナウイルス感染拡大の影響で授賞式、研修旅行が中止となってしまったのは非常に残念だと思いますが、ウイルスが終息したら、作文やスピーチで深めた知識や考えを持ってぜひ台湾を訪れてください。

石井 沙季（第10回）

受賞された皆様、この度はご受賞おめでとうございます。これまでの日々の努力が実を結んだものだと思います。今後のご健勝とますますのご活躍を心よりお祈り申し上げます。また、台湾研修旅行が中止となってしまい残念ではありますが、どうぞご自愛ください。

近況報告ですが、現在保育士をしており新型コロナウイルス感染者が出ないよう、日々保育の仕方、消毒など試行錯誤しています。異例な事態ですが子どもたちは毎日元気に過ごしているので、その笑顔を絶やさないためにも健康第一で頑張っていきたいと思っています。

小松 幸代（第5回）

今回の受賞、おめでとうございます。

皆さまの日本や台湾に対する、沢山の熱い想いが受賞という形になった事と思います。コロナウイルスの影響で、同じ仲間と共に研修旅行をする事は叶いませんでしたね。しかしそれでも沢山の方々の協力と自らの力で勝ち取った台湾旅行は、得難い経験になる事でしょう。

私は今、50カ国以上に支店があるグローバルな会社の製品を扱う仕事をしています。その製品を使う事で、購入額の1%が寄付活動、難病支援などに使われます。製品によっては森林保護や飢餓撲滅活動に関われるものもあり、日本だけでなく世界中の子供たちの未来に繋がる仕事だと捉えています。

私が日本にいながらグローバルな仕事を視野に入れられた事は、台湾の研修旅行を始めとした沢山の海外経験によるものです。私たちは日本人ですが、その前に地球で暮らしている一人の人間だという事を、異文化交流を通して強く感じました。

皆さま、是非、海外経験を沢山して下さい。違いを違いとして受け止めて、自分たちの良さを発信していって下さい。

福谷 恵麻（第15回）

この度は受賞誠におめでとうございます。

私事にはなりますが、私はこの3月に高校を卒業し、4月から大学生になる予定です。大学では、日台スカラシップで外交問題への興味が深まった事が一つのきっかけとなって、国際政治を専攻しようと考えています。

また、大学では第二外国語の中国語を集中的に学ぶコースを選びました。同世代の日台スカラシップ生達が堪能な中国語で現地の方々と交流する姿に、私は当時你好や謝謝くらいしか中国語を知らなかったので、大変刺激を受けた事が大きいと思います。今の目標は、現在もSNSで繋がっている日台スカラシップで出会った台湾の子達の投稿を理解できるようになる事です。

受賞者の方々には既に台湾に深い縁がある方も多いと思いますが、中には私がそうだったようにそこまで台湾の事について詳しくないという方もいると思います。そういう方にはこの受賞をきっかけにぜひ台湾の魅力を発見していただきたいです。研修旅行が中止になってしまうのは残念ですが、旅行を贈呈していただけるとお聞きしたのでぜひ楽しんでください!

増田 梨帆（第14回）

皆さん、受賞おめでとうございます!

授賞式・研修旅行が中止となり残念でした。しかし、縁あって集まった受賞者の方は、皆魅力的な方ばかりです。同じ台湾という興味を持っておられる仲間として、是非、沢山の受賞者・OBOGの方々にもお話を聞いてみて下さいね。

私も毎回、先輩方のお話をお聞きする度、感化されます。今後集まる機会がありましたら、お話し出来ると嬉しいです。

菊地 環（第13回）

このたびは本当におめでとうございます。毎年この時期に、事務局の方から受賞者が決まったという連絡を受けるたびに、自分が「日台スカラシップ」に応募したときのことを思い出します。

まだ皆様の作品を拝見しておらず恐縮ですが、たくさんの応募者の中から選ばれた輝かしい才能をお持ちの受賞者の方々と、今年もお会いしたいと心待ちにしておりました。

しかし残念ながら今年の授賞式ならびに研修旅行は、COVID-19のために中止になってしまったとのこと、非常に遺憾に思います。一番残念に思っていらっしゃるのは受賞者の皆様だと思います。本当に素晴らしい経験なので、ぜひ皆様にも現地で仲間と一緒に素晴らしい時間を過ごして欲しかったのですが…。

ただ、「日台スカラシップ」の縦横のつながりは変わりません。今すぐには難しいと思いますが、落ち着いたらぜひ受賞者の皆様やOBOGで集まりましょう! 私自身のことを話すと、学校も住む場所も趣味も違うけれど「台湾」というキーワードでつながるコミュニティは、人生において重要な役割を果たしていると感じています。つい、自分の好きな/居心地の良いコミュニティに依存しがちですが、このような機会をいただいたおかげでぐっと価値観が広がりました。もちろん台湾のことも応募する前よりも、もっと好きになりました。（恥ずかしながら、台湾と日本の歴史についてあまり詳しくなかった私は、このコミュニティを通じて自分と同年代で歴史にとても詳しい方がいることに衝撃を受けました。おかげで食事やカルチャーの面だけでなく、もっと俯瞰的に台湾を理解するようになったと言えます。）

最後に簡単に私の近況報告に重ねて、自分と「日台スカラシップ」の今のつながりをお話しさせていただきます。

大学1～3年まではテコンドーに打ち込みつつ、海外を旅しながら、将来のことはあまり考えず目の前のことを楽しんで過ごしておりましたが、東欧の旅から帰った昨年の10月頃から、なぜだか家にいる時間を大切にしたいという気持ちが強くなりました。それまでとてもアウトドアだったのですが、今は家で絵を描いたり、断捨離したり、アロマオイルを焚いたりすることにはまっています。自分の変化が面白いです。

今年に入ってからは、1ヶ月間昨年内定をいただいた会社でインターンシップをしておりました。仕事することは面白いと感じる一方で、残りの学生としての時間も大切にしたいと感じた1ヶ月でした。

そんな中いまだに、私が「日台スカラシップ」でホームステイをさせてもらった女の子と連絡を取り合っているのですが（しかも手紙で!）先日、その子の進路も聞くことができました。出会ったときはまだ高校生で、お互いの将来がどうなるかは全然想像していなかったけれど、こうしてキャッチアップし続けていると何か大変なことがあっても彼女もがんばってるんだろうなーと勇気づけられます。早く対面で会いたいのですが、なかなか時間が合わず実現しません。

長くなりましたが、私の近況はこんな感じです。

最後に改めて、今回の受賞本当におめでとうございました。ウイルスに負けずお互いがんばりましょう!

宣伝・PR、メディア掲載報告

今回実施された宣伝PR活動および
メディア掲載事例の抜粋を紹介します。

「日台文化交流　青少年スカラシップ」募集

産経新聞社とフジサンケイビジネスアイは、日本と台湾の青少年による文化交流促進を目指す「第17回日台文化交流　青少年スカラシップ」を実施します。作文とスピーチの2部門で学生を募集し、大賞1人、審査委員長特別賞1人、優秀賞12人程度の受賞者を台湾研修旅行に招待します。審査委員長の渡辺利夫拓殖大学学事顧問らが作品の選考に当たります。

応募締め切りは令和2年1月14日（火）。「台湾に関すること」をテーマに、作文部門（言語・日本語）は2000字以内、スピーチ部門（言語・中国語、台湾語）は論文審査が800字以内で応募ください。論文審査通過者を対象に、スピーチと質疑応答の審査を行います。詳しくはホームページ（www.sankeisquare.com/scholarship/）で。問い合わせは、日台スカラシップ事務局（産経新聞社メディア営業局内、電話03・3275・8656、FAX03・3275・8932）まで。

（2019年11月19日付　産経新聞）

日台スカラシップ　応募受け付け

フジサンケイビジネスアイと産経新聞社は、日本と台湾の青少年による文化交流促進を目指す「第17回日台文化交流　青少年スカラシップ」を実施します。作文とスピーチの2部門で学生を募集。優秀賞入賞者を台湾研修旅行に招待し、日台の相互理解・交流を深めるものです。

台湾の学校を訪問して授業に参加するなど、日本の若い世代がさまざまな経験を通じて、新たな友好関係を築くとともに、世界で活躍できる人材の育成を目指します。審査委員長・渡辺利夫氏（拓殖大学学事顧問）らが作品の選考にあたります。

【作品応募締め切り】2020月1月14日必着

【応募項目】◇作文部門（言語：日本語）

テーマ：「台湾に関すること」

文字数：2000字以内書式：A4サイズ原稿用紙縦向き、横書き20字×20行（推奨）※パソコン、手書きはどちらでも可

◇スピーチ部門（言語：中国語・台湾語）

テーマ：「台湾に関すること」

論文審査：スピーチで主張する内容を中国語（繁体字を推奨）で800字以内の論文にまとめてご応募ください。また日本語訳も添付してください。

本審査：論文審査通過者を対象に中国語または台湾語でスピーチしていただきます。（両方も可）時間はスピーチ3分、審査員との質疑応答2分の計5分です。配点は論旨30点、態度声調20点、熱意20点、即興（質疑応答）30点で合計100点。審査委員の合議で優秀賞を決定します。

※応募資格はホームページを確認。

【各賞】◇大賞1名

◇審査委員長特別賞　1名

◇優秀賞　12名程度

◇奨励賞　20名程度

◇佳作　数名程度

大賞には賞状、台湾研修旅行と奨学金5万円。審査委員長特別賞、優秀賞には賞状、台湾研修旅行。奨励賞、佳作には賞状を贈呈。

【発表】2020年2月　フジサンケイビジネスアイ、産経新聞紙上

【授賞式】2020年3月24日

【台湾研修旅行】2020年3月24～28日、4泊5日

【作品募集パンフレットの請求、問い合わせ先】日台スカラシップ事務局（産経新聞社メディア営業局内）

〒100―8079　東京都千代田区大手町1―7―2、電話03・3275・8656、FAX03・3275・8932、E―mail　scholarship@sankei.co.jp、ホームページ　www.sankeisquare.com／scholarship／

共催：台北駐日経済文化代表処

特別協賛：アパホテル、JR東海

協賛：三井物産、台湾新聞社

協力：外交部（台湾）、教育部（台湾）、台湾日本関係協会、台湾観光局

後援：日本台湾交流協会、自由時報

（順不同）

（2019年11月19日付　フジサンケイビジネスアイ）

MENU　SankeiBiz

訪問・その他

日台スカラシップ　応募受け付け

2019.11.19 05:00

フジサンケイビジネスアイと産経新聞社は、日本と台湾の青少年による文化交流促進を目指す「第17回日台文化交流　青少年スカラシップ」を実施します。作文とスピーチの2部門で学生を募集。優秀賞入賞者を台湾研修旅行に招待し、日台の相互理解・交流を深めるものです。

台湾の学校を訪問して授業に参加するなど、日本の若い世代がさまざまな経験を通じて、新たな友好関係を築くとともに、世界で活躍できる人材の育成を目指します。審査委員長・渡辺利夫氏（拓殖大学学事顧問）らが作品の選考にあたります。

【作品応募締め切り】２０２０月１月１４日必着

【応募項目】◇作文部門（言語：日本語）

テーマ：「台湾に関すること」

（2019年11月19日付　SankeiBiz）

THE SANKEI NEWS　トップ　速報　社会　政治　国際　経済　スポーツ　エンタメ　ライフ

金融・財政　産業・ビジネス　IT　新商品　プレスリリース　産経ネットショップ

海と生き物を守る"プラスチック・スマート"とは？/政府広報

「ゴッホ展」好評開催中！全出展作を網羅した公式図録を販売中

日台の架け橋となる若者の育成目指す　「日台文化交流　青少年スカラシップ」　学生対象に作品募集

2019.11.20 12:21 | 経済 | プレスリリース　PR TIMES

産経新聞社

産経新聞社とフジサンケイビジネスアイは、日本と台湾の青少年による文化交流促進を目指す「第17回日台文化交流　青少年スカラシップ」を実施します。作文とスピーチの2部門で学生（日本国籍）を募集。優秀賞入賞者を台湾研修旅行に招待し、日台の相互理解・相互交流を深めます。台湾の学校を訪問して授業に参加するなど、日本の若い世代がさまざまな経験を通じて新たな友好関係を築くとともに、世界で活躍できる人材の育成を目指します。応募項目は、作文部門（言語：日本語）とスピーチ部門（言語：中国語・台湾語）で、テーマはいずれも台湾に関すること。スピーチ部門は、論文審査を経て本審査を行います。審査委員長の渡辺利夫氏（拓殖大学　学事顧問）らが作品の選考にあたります。詳細は公式ホームページ（https://www.sankeisquare.com/scholarship/）で。

（2019年11月19日付　産経新聞）

（作品募集パンフレット）

（作品募集ポスター）

（産経新聞　作品募集広告）

（フジサンケイビジネスアイ
作品募集広告）

「日台スカラシップ」大賞に岩崎綸央さん

日本と台湾の青少年による文化交流の促進を目指す「第17回日台文化交流 青少年スカラシップ」（主催＝産経新聞社、フジサンケイビジネスアイ 共催＝台北駐日経済文化代表処 特別協賛＝アパホテル、JR東海 協賛＝三井物産、台湾新聞社）の受賞作品が決まった。

大賞には、岩崎綸央さん（東京中華学校高等部1年）＝写真＝のスピーチ「私にはお正月が2回ある」が輝いた。優秀賞には作文部門の石倉要さん（松江市立八雲中学校3年）ら13人が選ばれた。

作文とスピーチ（中国語・台湾語）の2部門で学生を募集し、427点の応募があった。大賞、優秀賞の受賞者を3月24日から4泊5日の台湾研修旅行に招待する予定だったが、新型コロナウイルスの影響により中止し、代わりに出発日を選べる2泊3日の台湾ペア旅行が贈られる。

（2020年2月27日付　産経新聞）

大賞に東京中華学校高の岩崎綸央さん

日台文化交流 青少年スカラシップ

日本と台湾の青少年による文化交流の促進を目指す「第17回日台文化交流　青少年スカラシップ」（主催＝産経新聞社、フジサンケイビジネスアイ、共催＝台北駐日経済文化代表処、特別協賛＝アパホテル、JR東海、協賛＝三井物産、台湾新聞社）の受賞作品が決まった。

大賞には、岩崎綸央（いわさきりお）さん（東京中華学校高等部1年）＝写真＝のスピーチ「私にはお正月が2回ある」が輝いた。優秀賞には作文部門の石倉要（いしくらかなめ）さん（松江市立八雲中学校3年）ら13人が選ばれた。

作文とスピーチ（中国語・台湾語）の2部門で学生を募集し、427点の応募があった。

大賞、優秀賞の受賞者を3月24日から4泊5日の台湾研修旅行に招待する予定だったが、新型コロナウイルスの影響により中止し、代わりに出発日を選べる2泊3日の台湾ペア旅行が贈られる。

受賞者は次の通り（カッコ内は学校名、敬称略）。

【大賞】スピーチ＝岩崎綸央（東京中華学校高等部1年）

【優秀賞】

◇スピーチ＝岩田怜晟（聖学院高等学校3年）▷清水彩也香（横浜中華学院高等部1年）▷高橋志織（宇都宮大学4年）▷南雲怜花（光塩女子学院高等科3年）▷根本順（東京都立深川高等学校3年）

◇作文＝石倉要（松江市立八雲中学校3年）▷岩松端（芝浦工業大学3年）▷小川友希（東京都立立川国際中等教育学校3年）▷下條円雅（学習院女子高等科2年）▷関本晃希（立教新座高等学校2年）▷沼上楽（加藤学園暁秀高等学校1年）▷村上陽香（立命館慶祥高等学校2年）▷吉浜雅（聖心女子学院高等科2年）

（2020年2月27日付　フジサンケイビジネスアイ）

トップ　速報　社会　政治　国際　経済　スポーツ　エンタメ　ライフ

大賞に岩崎綸央さん（東京中華学校）「第17回日台文化交流青少年スカラシップ」受賞者決定

2020.2.27 17:12 | 経済 | プレスリリース　PRTIMES

産経新聞社

日本と台湾の青少年による文化交流の促進を目指す「第17回日台文化交流 青少年スカラシップ」（主催：産経新聞社、フジサンケイビジネスアイ、共催：台北駐日経済文化代表処、特別協賛：アパホテル、JR東海、協賛：三井物産、台湾新聞社）の受賞作品が決まり、大賞には東京中華学校高等部1年、岩崎綸央（いわさき・りお）さんのスピーチ「私にはお正月が2回ある」が選ばれました。

真の若者交流を通じて明日の日台新時代を拓く

日台文化交流

青少年スカラシップ

（2020年2月27日付　産経ニュース）

MENU　SankeiBiz

話題・その他

大賞に東京中華学校高の岩崎綸央さん　日台文化交流青少年スカラシップ

2020.2.27 05:00

日本と台湾の青少年による文化交流の促進を目指す「第１７回日台文化交流　青少年スカラシップ」（主催＝産経新聞社、フジサンケイビジネスアイ、共催＝台北駐日経済文化代表処、特別協賛＝アパホテル、ＪＲ東海、協賛＝三井物産、台湾新聞社）の受賞作品が決まった。

（2020年2月27日付　SankeiBiz）

第17回 日台文化交流 青少年スカラシップ2020

日本と台湾の青少年による文化交流の促進を目指す「第17回日台文化交流　青少年スカラシップ」(主催=産経新聞社、フジサンケイビジネスアイ、共催=台北駐日経済文化代表処、特別協賛=アパホテル、JR東海、協賛=三井物産、台湾新聞社)。今回は作文とスピーチ(中国語・台湾語)の2部門で学生を募集し、427点の応募があった。大賞には、岩崎 絵央(いわさき えお)さん(東京中華学校高等部1年)のスピーチ「私にはお正月が2回ある」が輝いた。岩崎さんの中国語スピーチ内容を中国語と日本語訳で掲載する。

大賞 スピーチ部門

私にはお正月が2回ある

岩崎 絵央　東京中華学校 高等部1年

東京にある台湾の学校「東京中華学校」に小学一年生から通う私は、小・中・高とずっと学校では台湾の風習と言葉で過ごし、家に帰ると日本の風習と日本語で過ごしてきた。今ではもう当たり前のようになっている。私の家は完全に日本人の家系で、台湾とは何の縁も繋がりも無く、知り合いもいない。家族の誰も台湾語はおろか中国語もできない。当時私はまだ小さくて両親がなぜ私をこの学校に入れたのかわからなかったのだが、理由は他人とは違う育て方をしたかった父の選択によるものだったらしく、祖父母などは思いもよらない話に大層驚いたそうだ。

私の学校は日本にあるからこそなのか、台湾の行事や祝日、それにまつわる習慣またその由来を生徒によく教え、実践している。日本の風習と台湾の風習、両方の中でずっと育ってきた私にとって、一年で最も楽しみなのは日本で言うお正月、台湾で言う春節、つまり年越しだ。私には正月休みが2回ある。日本の正月休みと台湾の春節休みだ。日本のお正月には年越しそば、お雑煮、おせちを食べて初詣に行き、お年玉をもらう。春節には学校で春聯という新年の飾りつけをし、紅包と呼ばれるお年玉をもらう。一年に二回も年越しという豪華なイベントを味わえ、また二つの国の風習の中で成長している私はとてもラッキーだ。私は今まで台湾で実際に春節の時期を過ごしたことがないので、いつか実際に台湾での年越しを味わいたいと思っている。

日々の半分を台湾の環境で育ってきた私にとって、今や台湾はかけがえのない国の一つだ。第二の祖国と言っても過言ではない。大好きな台湾と台湾の人々をもっと知るためにも大学は台湾に留学したいと思っている。この日台文化交流青少年スカラシップも高校生になったら参加したいと以前から思っていた。日台スカラシップは様々な人の日本と台湾の繋がりが見聞できる魅力的な機会だ。先輩方の研修旅行記も素晴らしかった。私は将来、今までの経験を生かして、少しでも日本と台湾の良きかけ橋になれることを心から望んでいる。

我擁有兩個新年

從小學一年級開始，我就在東京中華學校就讀，在學校時，不管是上課或溝通，我都使用華語，並且學習臺灣的生活文化，過著臺灣式的學校生活。而回到家，我必須立刻把我的語言從華語轉換成日語，生活習慣換成日本式，這就是我這十年來的生活方式，這樣的生活方式對我來說已是理所當然。但其實我們家跟臺灣沒有任何關聯，而且也沒有人會說一句中文，當時我的年紀還很小，不理解為什麼父母會讓我進入這所臺灣人的學校，現在才知道，原來是一開始我父親想要讓我接受跟一般日本人不一樣的教育方式，連祖父母在當時知道父母的決定時，也很驚訝。

在我們的學校，每當碰到臺灣的節慶時，學校都會教我們如何慶祝，並說明有關那個節日的禮節及由來。從小，我就在臺灣及日本，這兩個不同國家的文化轉換裡逐漸成長。而在這兩個不同文化裡，讓我總是充滿期待，並且感到最有樂趣的就是春節，也就是「過年」，日語叫做「お正月」。我不曾在臺灣過過臺灣的新年，但因為臺灣是過農曆新年，所以每當寒假結束，新學期開學時，我才剛過完了日本的「お正月」，開學後就接著要迎接臺灣的農曆新年了，我們會在學校準備春節用的各式各樣裝飾品，用來布置教室，例如春聯、紅金色的春節擺飾等。另外我們也會從老師那裡拿到裝有壓歲錢的紅色袋子，俗稱「紅包」。就這樣很幸運的，我每年都可以度過臺灣與日本兩個國家的年。未來，我希望有機會能在臺灣過新年，更想要嚐嚐臺灣的年夜菜，藉以更進一步了解及體驗臺灣的文化。

臺灣對我來說已不是一個陌生的國家，而是成為培育我成長不可或缺的重要國家之一，更像是我的第二個故鄉。我想要更加了解臺灣的人及事，所以我計畫去臺灣升大學。從國中開始，我就很嘗試能參加日台青少年演講比賽，因為它可以帶給我更多有關臺灣的資訊，也可以讓我結交很多的臺灣年輕朋友，並能讓我體驗到更多臺灣的文化。將來我希望能以我所學，貢獻一份心力來做日本與臺灣的橋樑，這也是我未來的最大心願。

優秀賞

◆作文部門
石倉　要（松江市立八雲中学校 3年）
岩松　瑞（芝浦工業大学 3年）
小川 友希（東京都立立川国際中等教育学校 3年）
下條 円雅（学習院女子高等科 2年）
関本 晃希（立教新座高等学校 2年）
沼上　楽（加藤学園暁秀高等学校 1年）
村上 陽香（立命館慶祥高等学校 2年）
吉浜　雅（聖心女子学院高等科 2年）

◆スピーチ部門
岩田 怜晟（聖学院高等学校 3年）
清水彩也香（横浜中華学院 高等部1年）
高橋 志織（宇都宮大学 4年）
南雲 怜花（光塩女子学院高等科 3年）
根本　順（東京都立深川高等学校 3年）

主　催：産経新聞社　日本工業新聞社(フジサンケイビジネスアイ)
共　催：台北駐日経済文化代表処
特別協賛：アパホテル　JR東海
協　賛：MITSUI&CO.　台湾新聞社
協　力：外交部　教育部　台湾日本関係協会　Taiwan 台湾観光局
後　援：日本台湾交流協会　自由時報

審査委員(敬称略・順不同)

審査委員長：渡辺 利夫（拓殖大学 学事顧問）

※作文部門審査委員
張 温 碧（台北駐日経済文化代表処 広報部 次長）
さかもと未明（アーティスト）
室脇 勲（株式会社キャリアコンサルティング 代表取締役）
林 草 儀（自由時報 東京特派員）
河崎 真澄（産経新聞社 論説委員）

※スピーチ部門審査委員
顧 敬 誠（台北駐日経済文化代表処 広報部 部長）
馮 彦 圖（横浜中華学院 校長）
呉 育 羣（東京中華学校 教務主任）
林 草 儀（自由時報 東京特派員）
河崎 真澄（産経新聞社 論説委員）

（2020年3月24日付　フジサンケイビジネスアイ）

第17回日台文化交流
青少年スカラシップに寄せて

産経新聞論説委員
河崎 眞澄

日台文化交流青少年スカラシップは、日本にとって大切な隣人である台湾との交流を、次の世代にも引き継いでいくための人材の発掘と育成をめざして創設され、今回が17回目となりました。国際貢献プログラムの意義と価値をお認めいただき、支援を続けてくださっている台北駐日経済文化代表処や企業のみなさまに御礼を申し上げます。

第17回は新型コロナウイルスの世界的な感染拡大に鑑み、2020年3月に予定していた台湾研修旅行を中止せざるを得ない異例の事態となりました。悔しい残念な思いは入賞者のみなさんやご家族、台北駐日経済文化代表処をはじめ、受け入れ準備を進めていてくださった台湾のみなさん、応援してくださる企業のみなさん、そしてプログラムの実施に情熱を傾けてきた審査員の先生方、産経新聞のスタッフのだれもが、共有していることです。私はこのプログラム創設当初、台北支局長として現地で受け入れを手掛けた経験から、身をもって研修旅行の貴重な経験を知っていただけに、なおさらです。

しかし日本と台湾は永遠に親しき隣人です。研修旅行の形はとれませんでしたが、感染の終息をまって台湾を訪れ、あるいは台湾の方々の来訪を日本で受け入れて、改めて交流を深めることで、この先の10年、20年、30年と続く友情を築いていきましょう。長い歴史が紡いできた日本と台湾の絆は、新型コロナウイルスには決して負けません。

スピーチと作文の2部門あわせて、全国から427人の応募があり、そこで大賞に輝いた東京中華学校高等部の岩﨑綸央さんは、台湾とは縁のなかった日本の家系に生まれたものの、お父さまの選択で東京中華学校に学び、台湾を第二の祖国と感じるまでになった素直な気持ちを、みずみずしい北京語でスピーチされました。作文では「想いをつなぐ」と題して、戦前の日本統治時代に母方の高祖父が教職にあった台湾の学校との100年越しの心の交流を描いた聖心女子学院高等科の吉浜雅さんの文章に、惹かれました。時空を超えて人と人をつなぐ。教育という未来を作る仕事。まさに人と人が日本と台湾を結び付けます。人を残すことこそが、人生で最高の仕事ではないでしょうか。

日本も台湾も、度重なる震災や水害、そして不幸な戦争や戦後の混乱の時期を乗り越え、平和な時代と繁栄を築いてきました。英知と勇気に満ちた日本と台湾の人と人にとって、克服できない困難などありません。手を取り合って未来に向かっていきましょう。

第17回日台文化交流 青少年スカラシップ
実施報告書

発行・編集：産経新聞社

デザイン・印刷・製本：（株）豊島

https://www.sankeisquare.com/scholarship/

NIPPON TAIWAN 2020